第３章　京都大学医学部構内ＡＭ17区の発掘調査

五十川伸矢　伊藤淳史　伊東隆夫*

１　調査の概要

今回発掘調査を実施したＡＭ17区は，京都市左京区吉田近衛町所在の京都大学医学部構内西南部に位置し，旧白川の形成した扇状地の末端部にあたる（図版1-207)。この地に医学部４号館校舎の新営が計画されたため，新営予定地の1950㎡を全面発掘することとなった。現地調査は1993年５月６日に開始し，９月18日に終了した。本調査区の周辺では，医学部構内41地点・74地点・134地点・143地点，169地点，病院構内北辺の154地点・155地点などで遺跡が調査されており，中世・近世の遺跡の存在が確認されていた。

調査の結果，建物，土器溜，溝などからなる中世の遺構，野壷，溝などの近世の遺構を検出し，鴨川にほど近い遺跡地の土地利用の変遷を解明した。また，整理箱150箱にもおよぶ出土品があるが，このなかから，13～14世紀を中心とする土器や陶磁器の一括資料が多数得られた。また，井戸の底部には，漆器や刀子鞘，草履形木製品など，通常の状態では遺存することの少ない有機質の資料が残存していた。なお，本報告の第３節を伊藤，第６節を伊東，それ以外を五十川が執筆した。

２　層位と遺構

調査区全体は東から西へ，南から北へむかって傾斜し，西北部に落ち込む地形を形成し，Ｙ＝1885付近を境にして調査区の西半と東半で堆積層に違いがある（図13～15)。

西半では表土（第１層)，近世の水田の堆積層の黒灰色土（第２層）と茶褐色土（第３層）の下に，灰褐色土（第４層)，赤褐色土（第５層）が堆積している。灰褐色土は２枚に分層でき，赤褐色土とともに15～16世紀ごろの水田や畑地の耕作土である。茶褐色土や赤褐色土は堅く締まり鉄分などの沈澱物が多く含まれているため，水田の床土と推定される。暗赤褐色土（第６層)，黄灰色砂質土（第７層）は中世前半の遺物包含層である。この２層の間にはよく締まった粘土質の部分があり，上面で14世紀前・中葉ごろの柱穴や土坑などの遺構を検出した。黄灰色砂質土の下層は砂礫を多く包含し，その下には河川による自然堆積層の黄灰色シルト（第８層）や砂礫（第９層）がみられた。

＊木質科学研究所

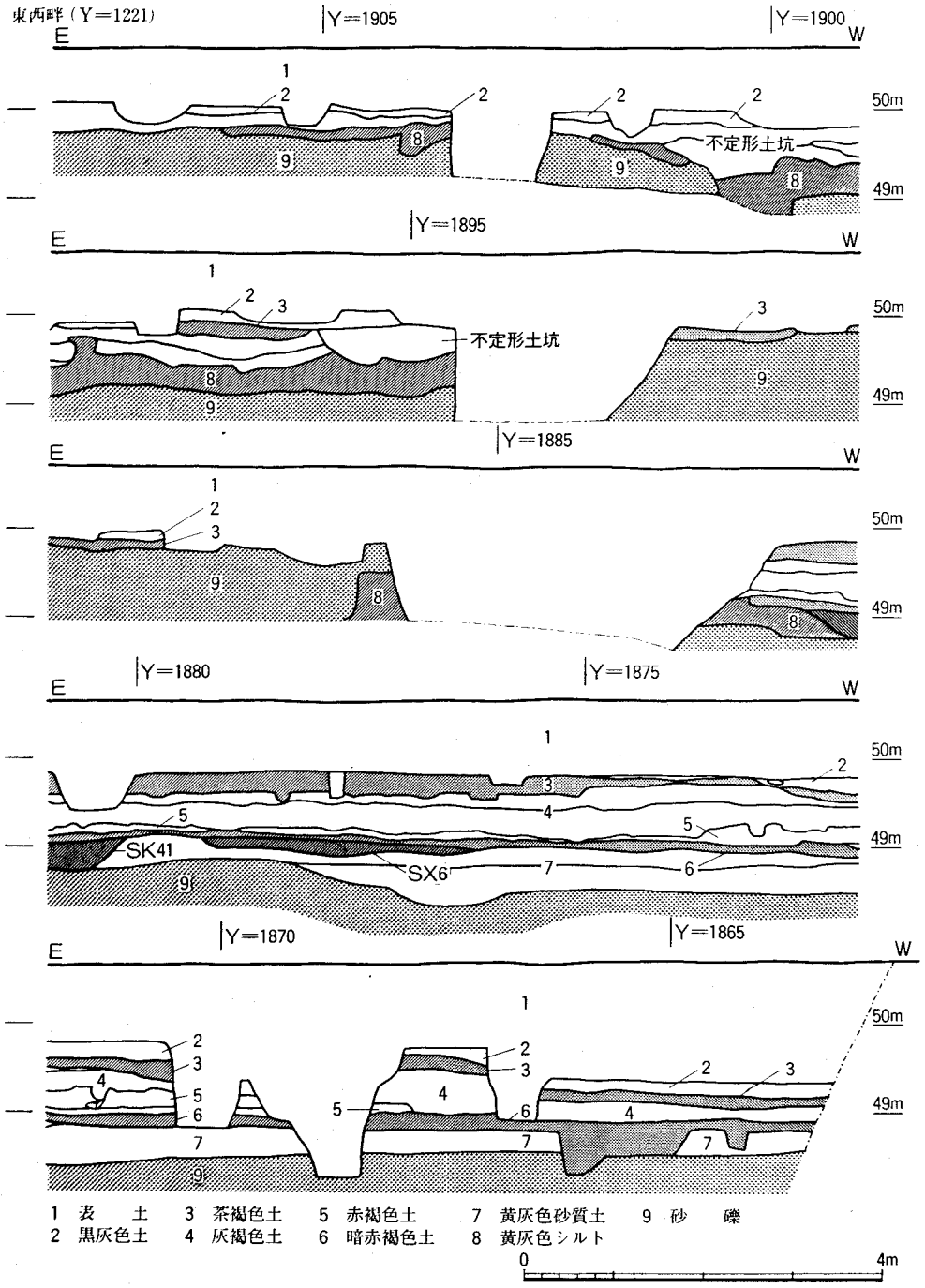


図13　調査区東西畔の層位　縮尺 1/80

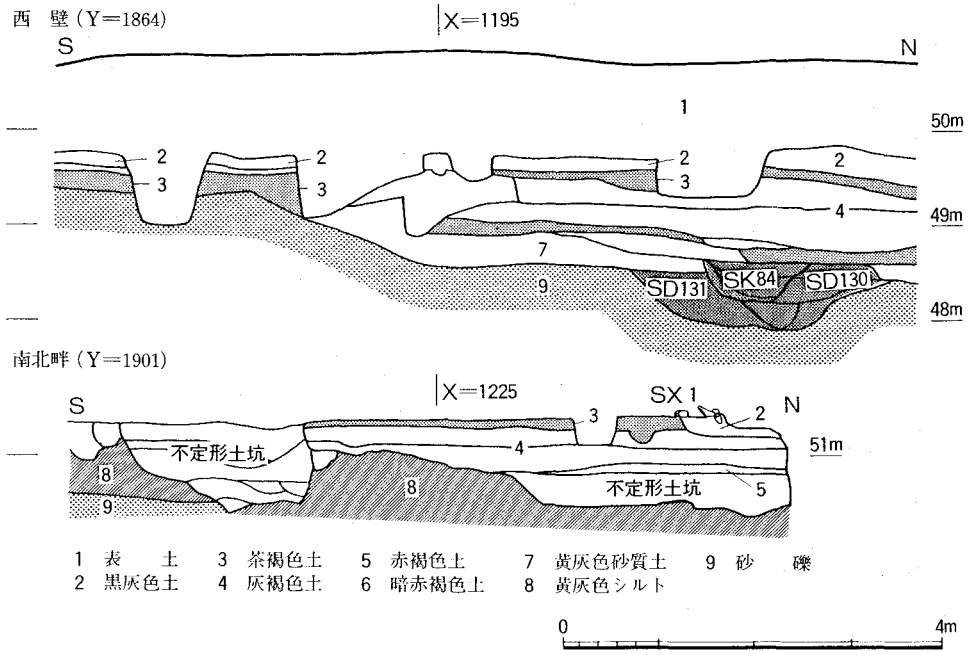


図14 調査区西壁・南北畔の層位 縮尺 1/80

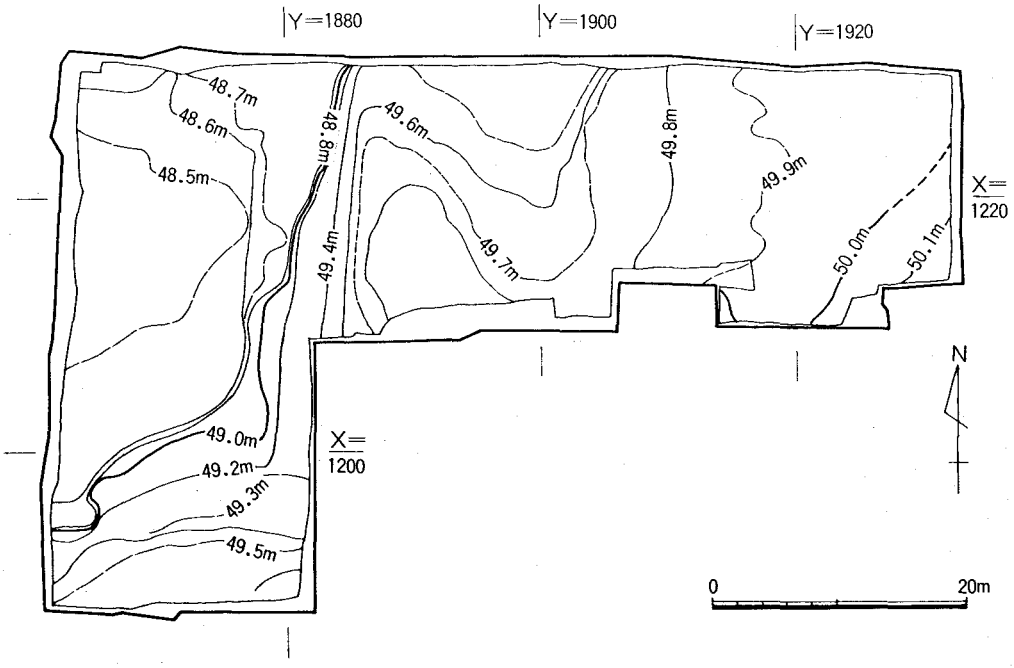
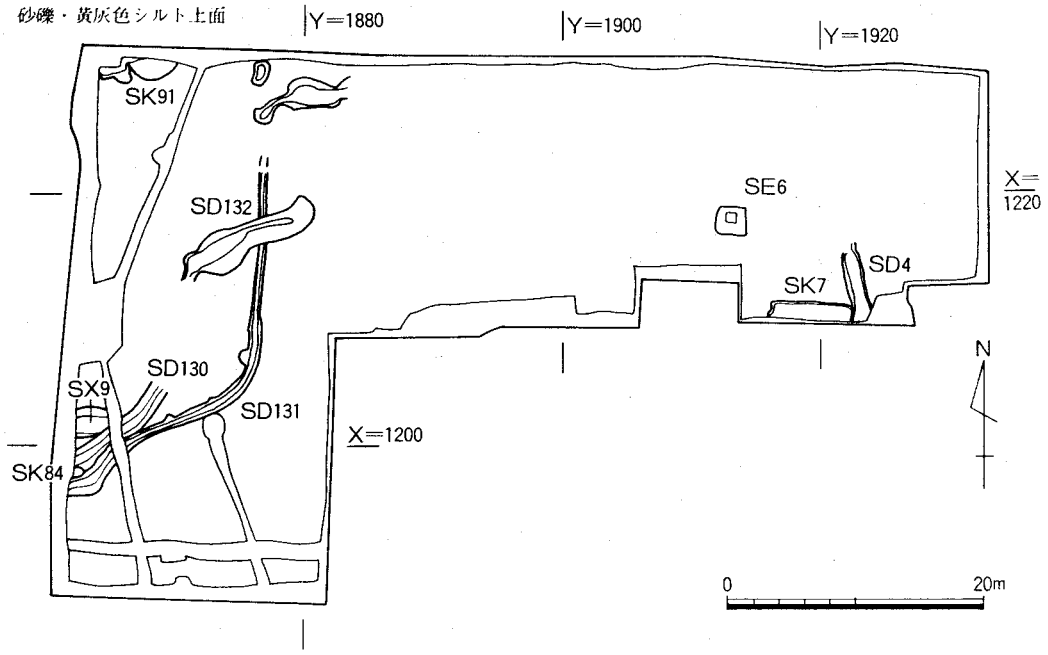


図15 黄灰色シルト・砂礫上面の地形 縮尺 1/600



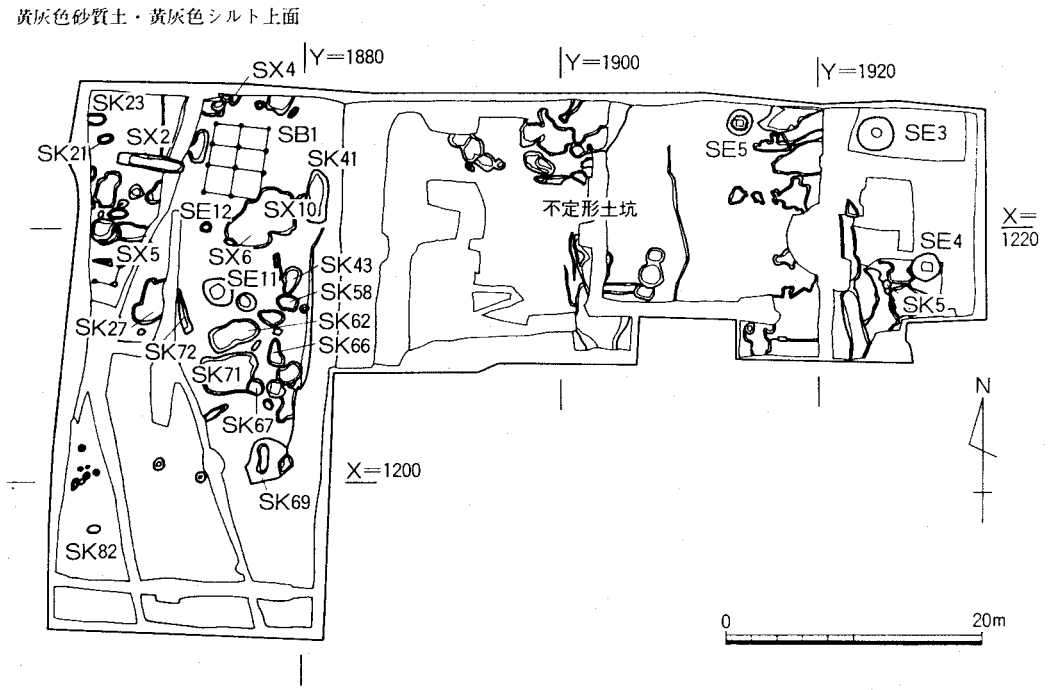
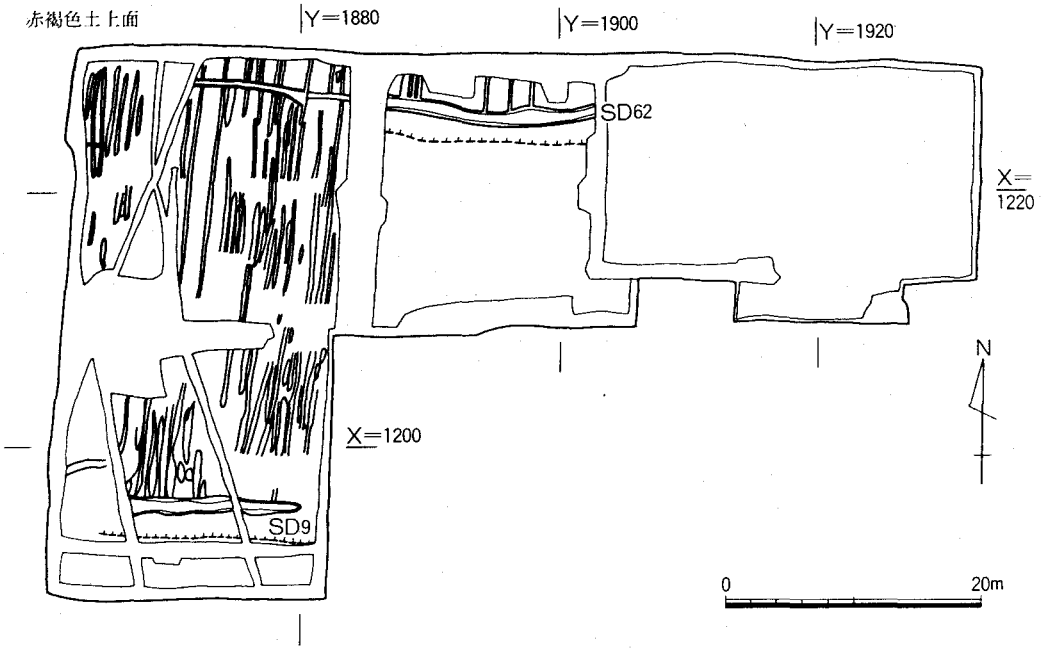


図16　調査区検出の遺構(1)　縮尺 1/600



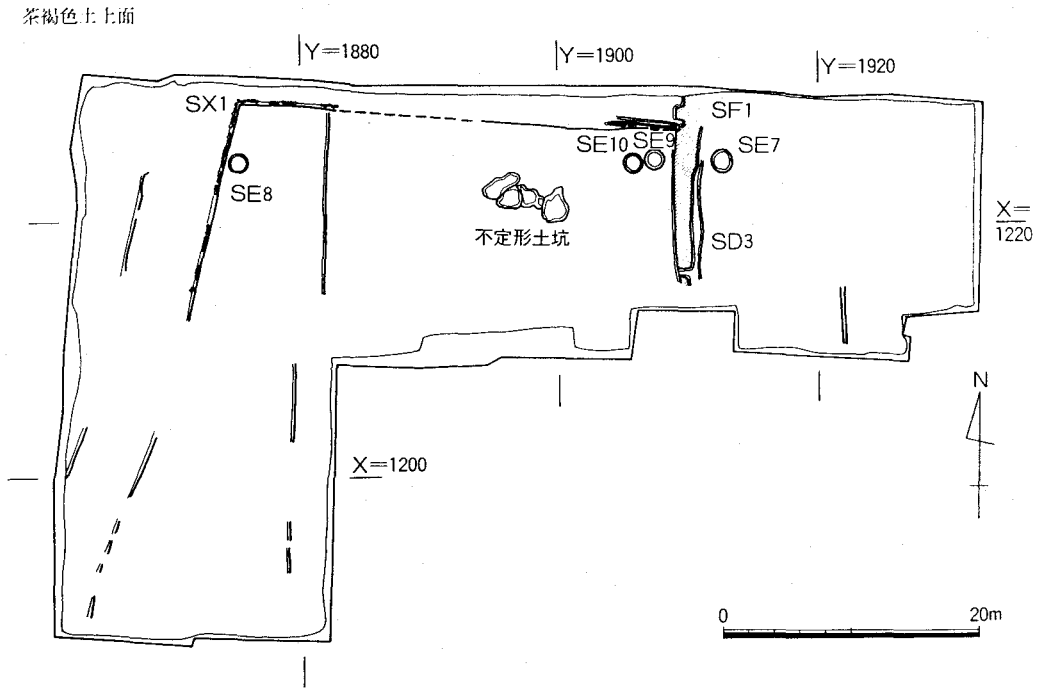


図17　調査区検出の遺構(2)　縮尺 1/600

一方，東半では，表土，灰黒色土の下に，近世・中世の堆積層の茶褐色土が広く堆積し，西北には西半と同様に赤褐色土が分布する。その下には黄灰色シルトや砂礫からなる旧白川が形成した自然堆積層があり，その上面では，井戸や溝，土取りのために掘削された不定形土坑などの近世・中世の遺構を検出した。不定形土坑によって中世の遺物包含層や遺構の多くが削平されたと思われる。また，遺物の出土量は，西半よりも格段に少ない。

さて，遺構の検出面と出土遺物の示す年代によって，大きく４段階の遺跡形成の時期を分別することができる（図16・17)。ここでは遺構の変遷について概説する。個々の遺構や出土遺物については後節で詳述する。

まず，黄灰色シルト・砂礫の両層上面で検出した遺構を図16上に示した。両層とも，本調査区では地山層にあたり，これらは最も古い遺構群と考えられ，12世紀～13世紀中葉ごろに形成されたものである。東半では，12世紀にさかのぼる土器溜ＳＫ７や13世紀の井戸ＳＥ６などがある。西半では，北西にむかって低くなる地形に対して，これを削平して，13世紀中葉にはＳＤ130・ＳＤ131・ＳＤ132などの溝が造成されている。西北隅には，土器溜ＳＫ91がある。次の段階に比較して遺構の分布は疎である。

次に，西半に堆積する黄灰色砂質土の上面検出の遺構，および東半の黄灰色シルトと砂礫の両層の上面で検出した遺構のうち，同じ時代のものを図16下に示した。これらは，13世紀後葉～14世紀中葉ごろの遺構と推定される。東半では不定形土坑や井戸ＳＥ４・ＳＥ３・ＳＥ５，溝ＳＤ４などがある。西半では井戸ＳＥ11・ＳＥ12や建物ＳＢ１をはじめ，土器溜ＳＫ62・ＳＫ41・ＳＫ43・ＳＫ67・ＳＫ66・ＳＫ58や土坑ＳＸ５・ＳＸ６・ＳＸ10などの生活関連の遺構が群在し溝は少ない。これらは，ひとまとまりの生活空間を形成していたと思われる。

さらに，赤褐色土上面検出の遺構を図17上に示した。これらは15～16世紀ごろに形成されたものである。上述の中世前半の遺構の状況とは一転して，井戸や土器溜などの生活関連の遺構はまったく姿を消し，東西方向のやや大きい溝ＳＤ62・ＳＤ９の間に南北方向の細い溝が多数検出された。耕作地としての利用が考えられる。

最後に，茶褐色土上面検出の遺構を図17下に示した。江戸後期を中心とする時代の遺構群と考えられる。道路ＳＦ１とそれに沿う溝ＳＤ３，石列ＳＸ１などがみられる。道路や石列の脇には，野壷ＳＥ７～ＳＥ10が検出され，東から西に緩やかに下る傾斜地に，棚田が形成されていたようである。このほか，中世のものと同じ形態の土取りのための穴の遺構もみられる。

3　縄文・弥生時代の遺物

本調査区では，縄文・弥生時代に属する遺構は，まったく検出されなかったが，中世遺構の埋土や黄灰色砂質土層より上の各層から，総点数195点の遺物が出土している。これらはいずれも本来の位置を保つものではないが，調査で用いた10 m×10 m の区画ごとに出土点数を把握し，各地点毎の出土比率を提示したのが（図18）である。この結果によれば，縄文・弥生時代の遺物は，ほぼ調査区全体でまんべんなく出土しているものの，とりわけX＝1200～1220，Y＝1870～1880付近に集中していることがわかる。この一帯は，北西に低くなる地形を中世以降に造成した部分にあたり，出土したこうした時期の遺物は，これらの造成や流れ込みによって周辺から集められたものと推測できる。

遺物は，石器類と縄文土器１点のほか，時期判別可能なものはすべて弥生中期前葉と中期後葉～後期にまとまりをもつ土器である（図版８・図19・20）。

Ⅲ１は縄文土器。爪形の刺突列の下に節の不明瞭な縄文（ＲＬ）がみとめられる。縄文中期前葉船元Ⅰ式に比定できる。Ⅲ２は弥生中期前葉の壺胴部片。櫛描直線文の間に板状工具の先端を用いて三角形の刺突列を施している。播磨・丹後など近畿地方の西側から北側にかけての周辺地域で頻度の高い文様である。Ⅲ３は石槍あるいは打製石剣と呼ばれる石器で，上半部分は欠損している。石材はサヌカイトで，基端部分に素材の原礫面が残る。側縁の片側はわずかに内湾するラインを描き，直線を呈するその反対側の側縁にも抉り状の打ち欠きがある。こうした基端部や両側縁をも含めて，表面は全面著しく磨かれている

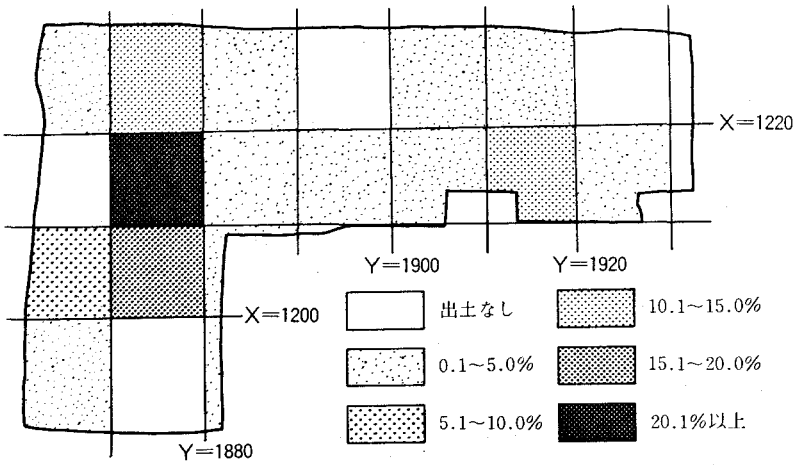


図18　縄文・弥生時代遺物の地点別出土頻度

が，側縁が幅２㎜あまりの面を成すまでに磨かれている点は，ほかに類例をみないものとして特に注意される。

弥生中期前葉の土器にはⅢ２のほかに，Ⅲ４の広口壷とⅢ５の直口壷，Ⅲ10・Ⅲ11の甕がある。このうちⅢ５とⅢ11は，口縁端部を指でつまみあげた突起状の装飾をもつ。山城以東の地域で顕著な装飾手法である。甕の器壁は薄く，外面から口縁内面にかけてはいずれも粗い刷毛目調整を施しており，この時期の近畿地方の技法的特徴に従っている。

中期後葉の土器には，Ⅲ６の直口壷口縁部，Ⅲ７の壷胴部，Ⅲ８の水差把手，Ⅲ９の高杯脚部，Ⅲ12の甕口縁部がある。Ⅲ６の直口壷は，口縁の周辺を横撫でし，端面に１条の凹線が施されている。頸部以下は縦位方向の刷毛目調整で，おそらく無文様の壷になると思われる。こうした特徴をもつ壷は，中期後葉～後期初頭にかけての山城・近江地域一帯に特徴的なものである。Ⅲ７の壷は，全面に水平方向の叩き目が観察でき，頸部との境界付近に板状工具による列点文が施される。この部分には突帯の剝離した痕跡があり，本来は突帯にまたがる形で刺突を行ったのであろう。Ⅲ８の水差は，把手を接着後の胴部に半截竹管を原体とする櫛描直線文を施している。Ⅲ12の甕は，頸部に幅広の刻目突帯を，強く横撫でされた口縁部の端面には３条の擬凹線を施す。また口縁の内面には微小な爪圧痕が列状に残っている。瀬戸内地方を中心として特徴的にみられる甕である。

Ⅲ13～Ⅲ19は弥生土器の底部。このうちⅢ13～Ⅲ17は，器壁がいずれも厚く，外面を丁寧にヘラミガキや刷毛目調整しており，中期前葉に属する壷あるいは甕の底部と思われる。これに対してⅢ18・Ⅲ19は器壁が薄く，底面もややくぼみ気味のものである。おそらく後期初頭以降の時期の底部であろう。外面はヘラミガキ調整していることから，壷の底部になるものと思われる。

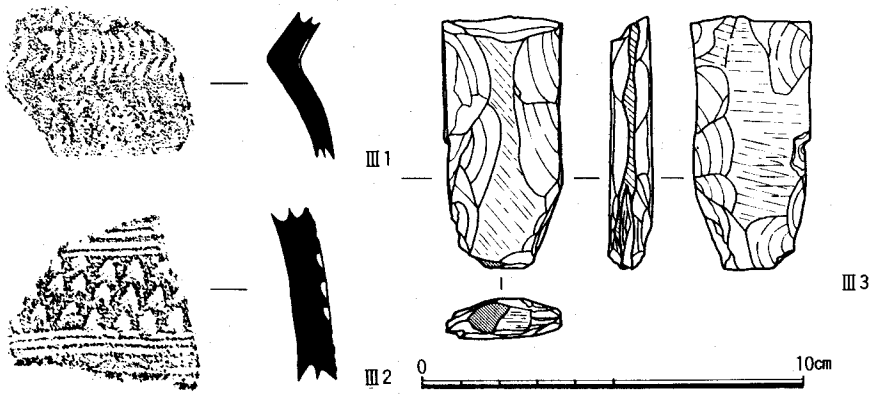


図19　縄文土器（Ⅲ１），弥生土器（Ⅲ２），石槍（Ⅲ３）　縮尺 1/2

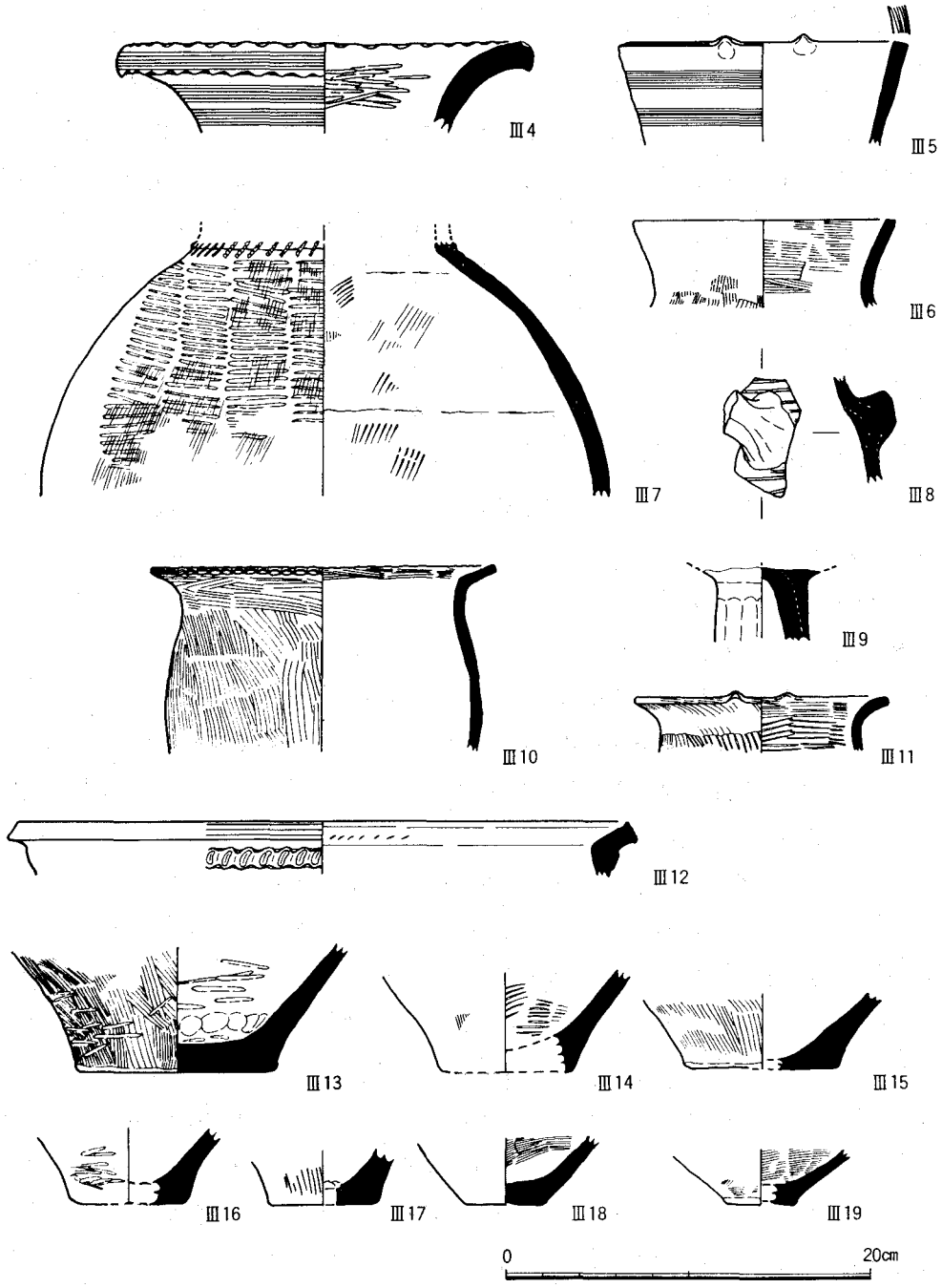


図20　弥生土器（Ⅲ４～Ⅲ７壷，Ⅲ８水差，Ⅲ９高杯，Ⅲ10～Ⅲ12甕，Ⅲ13～Ⅲ19底部）

4　古墳時代～古代の遺物

調査区の全域から，古墳時代～古代の遺物も出土した。これらは明確な遺構にともなうものではなく，中世あるいは近世の包含層や遺構からの出土品である（図21）。

Ⅲ20～Ⅲ24・Ⅲ26～Ⅲ36は須恵器。Ⅲ20～Ⅲ21は須恵器蓋杯の蓋。Ⅲ21は天井部と口縁部との境目に沈線がある。ともに６世紀の資料。Ⅲ22は蓋杯の身。底部には篦削りを施す。たちあがりを欠くが，６世紀の資料と思われる。Ⅲ23・Ⅲ24は宝珠つまみのつく蓋。Ⅲ23は宝珠もうず高く，内面にかえりがあり，７世紀後半のものと推定される。Ⅲ24は天井部に自然釉が厚くかかる。口縁端部を欠くが，壷の蓋の可能性が高い。Ⅲ25は土師器杯Ｂ。口縁端部は短く屈曲し，内面には放射状の暗文を施す。８世紀前半の資料である。Ⅲ26は杯Ａ。底部は篦切りをしたままである。Ⅲ27～Ⅲ31は杯Ｂ。良好な資料ではないが，Ⅲ29を除いて，高台は直立しており，８世紀のものであろう。Ⅲ32は高杯。Ⅲ33・Ⅲ34は長頸壷の一部。肩部の下端に沈線がある。Ⅲ35は羽釜。鍔の断面は細い三角形をなす。Ⅲ36は鉢。いわゆる鉄鉢状の形態をなす。

Ⅲ37～Ⅲ43は緑釉陶器。Ⅲ37のみ平高台。Ⅲ37～Ⅲ39・Ⅲ41・Ⅲ42は須恵質で淡緑色の釉がかかる。Ⅲ40は土師質で濃緑色の釉がかかる。Ⅲ40～Ⅲ42は底部周辺に，沈線もしくは段がめぐる。Ⅲ43は緑釉陶器の塔。上半は半球形を示す。淡緑色の釉がかかる。Ⅲ44～Ⅲ47は土師器甕。Ⅲ45～Ⅲ47は口縁端部がやや内側に肥厚する。内外面は丁寧な撫でを施す。９～10世紀ごろのものであろう。

古墳時代から古代にかけての遺構は，現在のところ医学部構内では未発見であるが，総合人間学部（旧教養部）・病院の両構内では，いくつかの遺構を調査している。まず，教養部構内の111地点（ＡＰ22区）では周溝をもった古墳を検出し，５～６世紀の須恵器，土師器，鉄製品が出土した。また，平安中期ごろの梵鐘鋳造遺構　ＳＫ245からは，鋳型や炉の残片のほか，９～10世紀ごろの土師器，須恵器，黒色土器などが出土している〔五十川・飛野84〕。また，病院構内では，154地点（ＡＪ18区）で７世紀後半の鍛冶関係の土坑ＳＫ51があり，鉄滓のほか，須恵器や土師器が出土した〔五十川ほか89〕，同構内191地点（ＡＨ19区）でも，奈良時代の土坑ＳＫ22が検出され，須恵器・土師器の出土がみられた〔浜崎ほか93〕。医学部構内74地点（ＡＰ19区）でも，遺構は明瞭ではないものの，奈良～平安時代とみられる二彩釉陶器，緑釉陶器，須恵器などがまとまって出土しており〔清水・吉野81〕，今後医学部構内でも，この時期の遺構が検出されるものと考えられる。

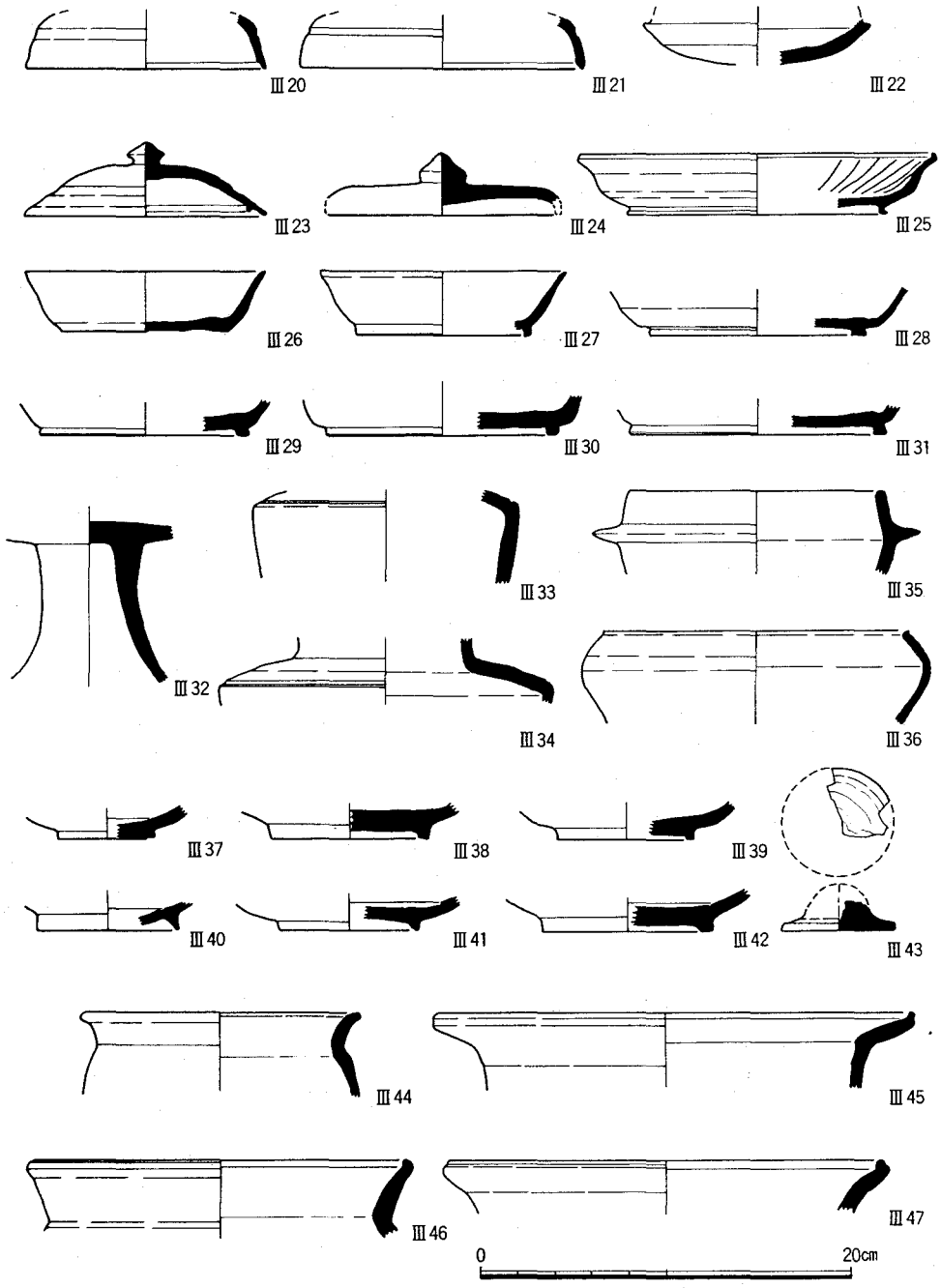


図21　古墳時代～古代の遺物（Ⅲ20～Ⅲ24・Ⅲ26～Ⅲ36須恵器，Ⅲ25・Ⅲ44～Ⅲ47土師器，Ⅲ37～Ⅲ43緑釉陶器）

5　中世の遺跡

(1)　中世の遺構（図版４～７，図16・17上・22・23）

中世の遺構は，12～14世紀を中心とする中世前半の遺構群とそれ以降の遺構群に，大きくわかれる。中世前半の遺構として建物，井戸，溝，土坑，土器溜などがあり，黄灰色砂質土上面では，一連の居住空間を形成していたものと考える。一方，中世後半の遺構は，南北方向の小規模な溝からなっており，耕作地が形成されていたことが確認される。

井　戸（図22・23）　　東半では，不定形土坑によって，溝や土器溜などの遺構が破壊されており，掘形の深い井戸は，その底部がよく残っていた。

井戸ＳＥ６は，大きく壊れていたが，平面隅丸方形の掘形をもち，方形木枠の下に円形の水溜をもつものと推定する。13世紀前葉～中葉ごろのものである。

井戸ＳＥ４は，平面円形の掘形をもち，方形木枠の水溜を検出した。枠板は四隅を４個の鉄釘で固定している。水溜からは，漆塗椀，小型の羽釜を３個連結した瓦器，滑石製硯などが出土し，祭祀用品の可能性がある。13世紀後葉ごろのものである。

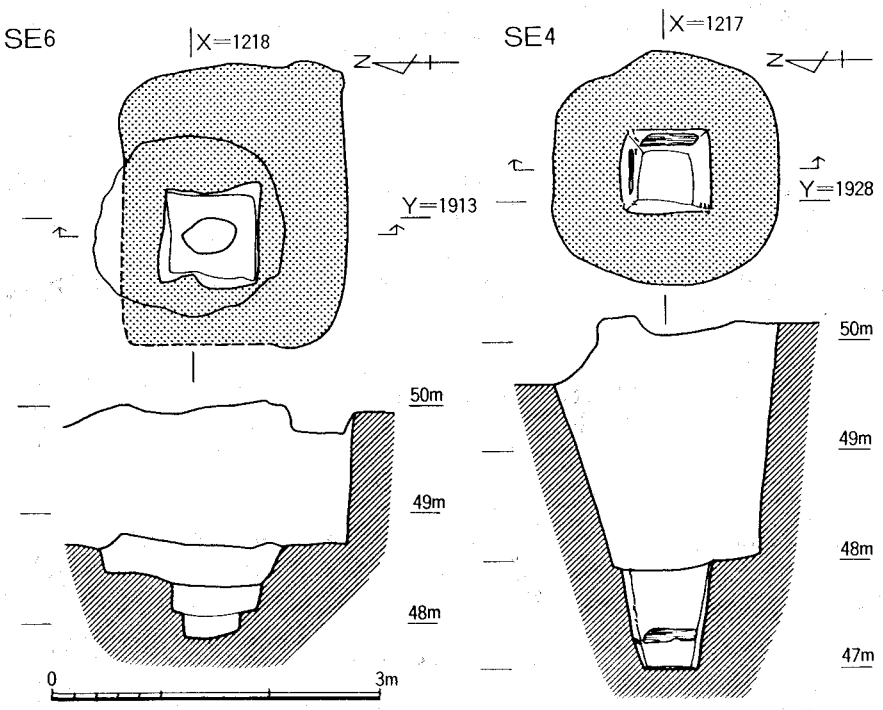


図22　井戸ＳＥ６・ＳＥ４　縮尺 1/70

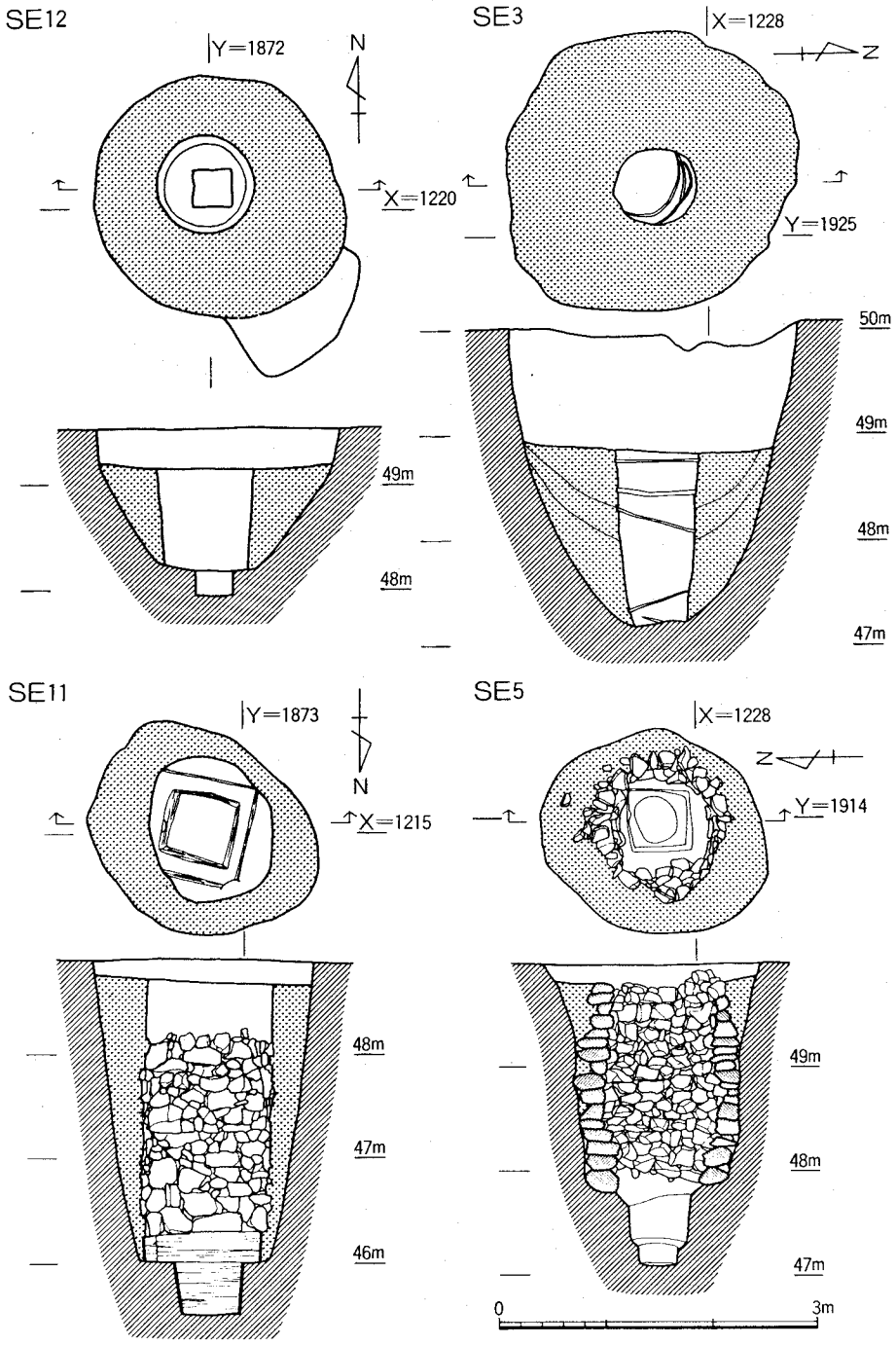


図23　井戸ＳＥ12・ＳＥ３・ＳＥ11・ＳＥ５　縮尺 1/70

井戸ＳＥ12は，平面円形の掘形をもち，井戸側も円筒形をなす。底部に方形の水溜があり，14世紀前葉ごろのものである。井戸ＳＥ３では，掘形が深さ３ｍほどの大きなすり鉢状をなし，桶あるいは曲物などの円形状の木製品を積み重ねて井戸側としている。井戸側そのものは腐朽していたが，桶枠の箍あるいは曲物の締枠と考えられる痕跡を検出できた。14世紀前葉～中葉ごろのものである。

井戸ＳＥ11は，平面円形の掘形をもち，石組で井戸側を形成する。水溜部は板材を方形に２段に組んでいる。底部から箸や刀子鞘などの木製品が良好な状態で出土した。

井戸ＳＥ５は平面円形の掘形をもち，井戸側は石組による。板材を方形に組んだ下に，さらに円形の水溜を設けている。おそらく曲物を設置していたのであろう。ＳＥ11とともに，14世紀中葉ごろのものである。

以上のように，今回検出した井戸のうち，木製の井戸側（井筒）をもつものが古く，石組の井戸側をもつものがより新しい傾向があり，これまでの医学部・病院構内で検出した井戸の構造上の時代的変化と軌を一にする。

建　物　西半の北部において，黄灰色砂質土の上面で掘立柱建物ＳＢ１を検出した。柱穴から２間×３間を確認した。柱間は，東西約1.1ｍ，南北約0.8ｍ。小規模な建物であり，14世紀前葉～中葉のものと推定される。また，西半の西部一帯には黄灰色砂質土の上面で，柱穴が多数検出されており，規模や方向は不明ながら，建物あるいは柵などがいくつか存在したものと推定できる。このほか，灰褐色土の上面でも，西半の北部で２間×４間の小規模な掘立柱建物を確認している。

土　坑　西半の砂礫層上面ではＳＫ91やＳＫ84，ＳＸ９などを検出した。西半の北西隅で一部を検出したＳＫ91は，13世紀ごろに形成された土器溜である。土坑ＳＫ84は，西南部で検出し調査区外に続くが，多量の鉄滓のほか鞴の羽口が出土した。13世紀中葉ごろの鍛冶関係の遺物を廃棄したものと考えられる。また，土坑ＳＸ９はＳＤ130に切られていて規模や構造は不明である。13世紀中葉ごろの遺物が出土したが，その性格は不明。東半の黄灰色シルトの上面では，その南東部で土器溜ＳＫ７を検出した。12世紀前葉ごろの遺物がまとまって出土した。

西半の黄灰色砂質土の上面では，数多くの土坑を検出した。土坑ＳＸ２・ＳＸ４は，拳大の礫を埋め込んだ溝状の遺構。性格は不明であるが，建物ＳＢ１と方位をあわせており，一連の遺構ではないかと推定される。ともに14世紀中葉ごろの遺物が少量出土した。ＳＸ６・ＳＸ10は，他の土坑や土器溜と比較して，やや大きめの掘形をもつ土坑である。埋土

中に大量の炭，土師器が含まれていた。ＳＸ６がＳＸ10を切っており，ＳＸ10北側の壁面の一部に，赤褐色に焼けている部分が認められる。出土遺物は，ほぼ14世紀中葉ごろのものである。西半の西北部では赤褐色の粘土を数cmの厚さで船底状にはりつけた土坑ＳＸ５がある。底部に泥が堆積しており，水を溜める施設ではないかと推定している。これも14世紀中葉ごろの遺構である。

土器溜は建物ＳＢ１の南辺と西辺に分布しており，その形状や規模は一定しない。ＳＫ21・ＳＫ23・ＳＫ72は13世紀後葉ごろ，ＳＫ62・ＳＫ69などは，13世紀後葉～14世紀前葉ごろ，ＳＫ41は14世紀前葉ごろ，ＳＫ27・ＳＫ43・ＳＫ58・ＳＫ66・ＳＫ67・ＳＫ72・ＳＫ82などは14世紀中葉ごろのものと，それぞれ推定される。出土遺物の大半は，土師器の皿と椀であり，須恵器すり鉢，瓦器羽釜・鍋のほか，少量の輸入陶磁器が含まれている。とくに14世紀中葉の土器溜では，土師器しか含まれていないものが多い。東半では土器溜ＳＫ５があり，13世紀中葉ごろの土師器がごく少量ながら出土した。

このほか，東半には不定形の土坑が分布している。これらは黄灰色シルトの広がる範囲のみに分布し，このシルトを採取するために掘削した土取り穴の遺構と考えられる。これらの不定形土坑の多くは，埋土に含まれている遺物から，ほぼ14世紀前葉～中葉の時期に掘削されたと推定される。前述のように，この不定形土坑によって中世の包含層や遺構の大半が破壊されたとみられる。

溝　西半部の砂礫層上面では，谷状の地形を切り崩して平坦面を造成しており，その崖の下で溝ＳＤ130・ＳＤ131・ＳＤ132を検出した。これらは上からの雨水などを南西部へ排出したものと推定される。ＳＤ130とＳＤ132は，つながって同一の溝であった可能性もあり，ＳＤ130はＳＤ131を切る。ともに13世紀中葉以降に埋積している。東半の南東部で検出した溝ＳＤ４も，13世紀中葉ごろのもので，土器溜ＳＫ７を切っている。

西半の赤褐色土上面や灰褐色土上面には，多数の溝が検出された（図17上）。東西方向でやや幅の広い溝ＳＤ62・ＳＤ９は，水路として機能したものと推定される。このほか，全域に幅20～30cm程度の小さい溝が南北方向に密に分布する。東半では，赤褐色土はその西北部にのみ広がり，西半と同様にその上面で小さい溝を多数検出した。こうした小規模の溝は，水田や畑の耕作にともなって掘削されたものではないかと推定される。また，その上層に堆積している灰褐色土は耕土であったとみられ，その上面では作物の株跡とみられる不整円形の痕跡が多数検出された。これらの溝は，ほぼ15～16世紀ごろに形成された遺構と考えられる。

(2) 中世の遺物（図版９～14，図24～37，表１・２）

中世の包含層・遺構出土遺物は，整理箱約100箱におよぶ。このうち，灰褐色土とその下面検出遺構出土遺物は16％，赤褐色土と下面遺構では12％，暗赤褐色土と下面遺構では37％，黄灰色砂と下面遺構では35％が，それぞれ出土している。遺物包含層のうち，暗赤褐色土と黄灰色砂質土にかかわる遺物が７割をしめており，これらは13～14世紀を中心とするものである。また，それらより上層の中世後半および近世に形成された包含層や遺構でも，中世前半の遺物が多く含まれており，中世前半の遺物の全体量は，本調査区出土遺物の９割以上をしめている可能性が高い。これから，この時代に最も活発に生活が営まれていたと推定できる。同様の傾向は，調査区周辺の京都大学総合人間学部（旧教養部）・医学部・病院などの構内の遺跡において共通する。

遺物の整理にあたっては，まとまった量の土器や陶磁器などが出土した遺構について，1/6 以上の口縁部の残るものを抽出した。そして，土器の種類や器種，口縁部形態によって分類し，それぞれの口縁径と残存率を計測した。さらに，分類別の個体数と器種別比率，総量などを算定集計した。本項では，それらのうちおもなものの実測図と計測結果を遺構あるいは包含層ごとに示し，その年代や特徴について説明する。また，墨書土器に関しては，まとめて実測図を示して解説する。

このほかに，溝や井戸の底部から，通常の堆積土層のなかでは遺存しない漆器や木製品，種実などの有機質の遺物が，かなり良好な保存状態で出土しており，そのなかには非常にめずらしいものも含まれている。遺跡地の基盤は砂礫層であり，時代が降りるにしたがって地下水位は低下の一途をたどっているため，これらの資料は，かならずしも良好とはいえない状況下で，有機物がよく遺存した稀な例といえるだろう。これらもまとめて実測図を示して解説する。また，井戸枠などの出土木材や炭化材の樹種については，第６節でまとめて報告する。

ＳＫ７出土遺物（Ⅲ48～Ⅲ69）　Ⅲ48～Ⅲ66は土師器皿である。黄褐色ないし赤褐色を呈する。Ⅲ48～Ⅲ52は皿ＡⅠ。Ⅲ48は２段撫で素縁手法 C_3類，Ⅲ49～Ⅲ52は２段撫でつまみ上げ手法 C_4類。皿ＡⅠは15cmにピークがある。口縁形態では C_4類が過半数をしめ，C_3類がこれにつづく。Ⅲ54～Ⅲ66は皿ＡⅡ。Ⅲ54・Ⅲ55・Ⅲ58～Ⅲ61は C_3類，Ⅲ56・Ⅲ57・Ⅲ62～Ⅲ64・Ⅲ66は C_4類，Ⅲ65は口縁が１段撫で手法 D_3類の口縁形態を示す。皿ＡⅡは10cmにピークがあり，C_3類が過半数をしめ，C_4類，そして D_3類がつづく。12世紀前葉ごろの資料と考えられる。

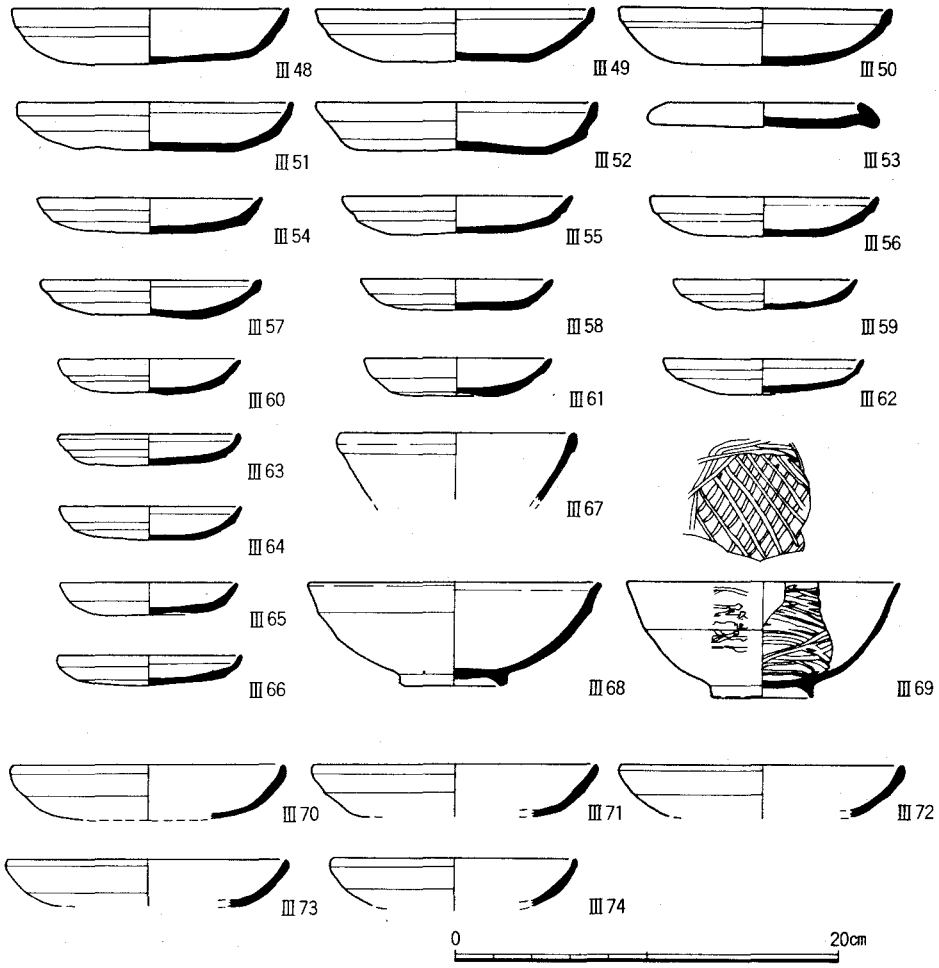


図24　ＳＫ７出土遺物（Ⅲ48～Ⅲ66土師器，Ⅲ67白磁，Ⅲ68・Ⅲ69瓦器），
ＳＫ91出土遺物（Ⅲ70～Ⅲ74土師器）

Ⅲ53は受皿。直径は約12cm，底面端部が屈曲する。Ⅲ67は白磁椀。口縁は小さい玉縁状を示す。Ⅲ68・Ⅲ69は瓦器椀。Ⅲ68は磨滅が著しく器壁の調整は不明である。Ⅲ69は外面上半と内面に篦磨きをほどこし，内底面には格子状の暗文を施す。これらは，本調査区出土の中世の遺物のうち，最も古い段階のものである。

ＳＫ91出土遺物（Ⅲ70～Ⅲ74）　Ⅲ70～Ⅲ74は土師器皿ＡⅠ。ともに器体は丸味を帯びており，口縁部の形態は１段撫で面取り手法 D_4類を示す。口径は14～15cmのものが多く，12世紀後葉～13世紀前葉ごろの年代を示す。調査区西半の中世の遺構のうち，最も古い段階のものである。

ＳＤ132出土遺物（Ⅲ75～Ⅲ121）　Ⅲ75～Ⅲ103は土師器。Ⅲ75～Ⅲ91は赤褐色，Ⅲ92～Ⅲ103は灰白色を呈する。Ⅲ75～Ⅲ80は皿ＡⅠ。Ⅲ75・Ⅲ76は器体が丸味を帯びる１段撫で面取り手法D_4類，Ⅲ77・Ⅲ78は底面が平坦で口縁が直線的に伸びる１段撫で面取り手法D_5類，Ⅲ79・Ⅲ80は器壁が薄く，１段撫で面取り手法D_6類である。皿ＡⅠの口径は12cmにピークがあり，D_5類が過半数をしめ，D_6類がこれにつぐ。Ⅲ81～Ⅲ88は皿ＡⅡ。Ⅲ84・Ⅲ86・Ⅲ87は１段撫で素縁手法D_2類，Ⅲ81～Ⅲ83・Ⅲ85・Ⅲ88～Ⅲ90は１段撫で面取り手法D_5類。D_5類が過半数をしめ，D_2類がこれにつぐ。皿ＡⅡの口径は９cmにピークがある。Ⅲ91は受皿。径は5.5cmを測る。

Ⅲ92～Ⅲ97は椀ＡⅠ。すべて１段撫で面取り手法D_5類である。Ⅲ98～Ⅲ102は椀ＡⅡ。口縁部形態はほぼすべてD_5類であるが，口径と器高によってⅢ98，Ⅲ99・Ⅲ100，Ⅲ101・Ⅲ102の３種の法量に識別できる可能性がある。全体として口径は８cmのものが多い。Ⅲ103は蓋。灰白色を呈し，口径は約７cm。天井部は緩やかな円弧をえがく。口縁は直立し，端部は面をなす。白磁合子蓋などを模倣したものと考えられる。

Ⅲ104～Ⅲ106は瓦器椀。ともに内面にのみやや粗い篦磨きを施す。Ⅲ104では，見込みに蛇行する暗文を施す。Ⅲ107は瓦器小椀。篦を使って体部を５輪花状にくぼませ，くぼみの両側を撫でによって整形している。口縁部から内面にわたって篦磨きを施す。見込みには菊花状の暗文を加える。本部構内ＡW27区（181地点）検出のＳＫ３出土遺物中に類例があり〔五十川ほか92 pp. 14,16〕，13世紀から14世紀にかけての特徴的資料である。

Ⅲ108は口禿の白磁皿。Ⅲ109は青磁椀。鎬蓮弁文をもつ。Ⅲ110・Ⅲ111は白磁椀。ともに口禿である。Ⅲ112は青白磁合子の蓋。天井部は７弁の輪花状に作り，型押しによる鳳凰の文様を描く。Ⅲ113は灰釉系陶器鉢。口縁端部は丸い。Ⅲ114・Ⅲ115は須恵器すり鉢。内面下半から底部にかけては，使用による磨滅が著しい。口縁端部は下端がやや拡張する。Ⅲ116は褐釉陶器壷。長胴の体部の上にちいさくすぼまった口縁部がつく。体部の下ほど器壁が厚い。体部外面の下半を横方向に篦削りし，さらにその中央部には上下方向の撫での痕跡が残る。内面には挽目が明瞭に残る。

Ⅲ117～Ⅲ121は瓦器。Ⅲ117・Ⅲ118は羽釜。口縁部は直立し，鍔はやや上向きに突出する。体部は丸い形状と推定される。Ⅲ119・Ⅲ120は鍋。Ⅲ119の口縁部はＬ字状に屈曲するが，Ⅲ120は屈曲がややあまい。Ⅲ120の体部は垂直であるが，底部は丸く屈曲する。Ⅲ121は盤。口縁部上面は平坦で，内面の端部は突出する。底部には籾殻の圧痕が残る。これらは，13世紀中葉～後葉を中心とする時期の資料と考えられる。

ＳＤ130出土遺物（Ⅲ122～Ⅲ178）　Ⅲ122～Ⅲ155は土師器。Ⅲ122～Ⅲ135は赤褐色，Ⅲ136～Ⅲ155は灰白色を呈する。Ⅲ122～Ⅲ124は皿ＡⅠ。Ⅲ122は口縁が直線的で端部が丸い１段撫で素縁手法のD_2類，Ⅲ123・Ⅲ124は１段撫で面取り手法D_5類である。皿ＡⅠの口縁は12cmにピークがあり，D_5類が過半数をしめ，D_6類がこれにつぐ。Ⅲ125～Ⅲ134は皿ＡⅡ。Ⅲ125～Ⅲ129は１段撫で面取り手法D_5類，Ⅲ130～Ⅲ134は１段撫で素縁手法E_1類。D_5類が過半数をしめ，D_2類，E_1類などがある。口径は８cmにピークがある。Ⅲ135の口径は約20cmを測り，皿ＡⅠよりもかなり大型の皿とみられる。口縁部は１段撫で面取り手法D_5類を示し，器壁がとくに厚い。類例は少ないが，医学部構内ＡＮ20区検出の井戸ＳＥ２からまとまって出土したことがある〔五十川86 p. 33-5〕。

Ⅲ136～Ⅲ138は椀ＡⅠ。口縁形態は，ともに１段撫で面取り手法D_5類である。口径は13cmにピークがある。Ⅲ139～Ⅲ143は椀ＡⅡ。口縁部形態はほぼすべてD_5類であり，口径は８～９cmのものが多い。Ⅲ144～Ⅲ146は受皿。口径は５～６cmを測る。Ⅲ147・Ⅲ148は轆轤を使用して成形された皿。体部下半には強い挽目が，底部には糸切痕が明瞭に残り，口縁部は１段撫でを施す。Ⅲ149・Ⅲ150は高杯の杯部，軸部および脚部である。杯部内面中央には浅い凹部がある。軸部外面は面取りされており，内面には芯を入れて形成した痕跡が残る。Ⅲ151は片口。口縁部は１段撫でを施す。Ⅲ152～Ⅲ155はミニチュアの羽釜。Ⅲ152・Ⅲ153・Ⅲ155はほぼ同大で，口径約６cm。Ⅲ152は内面に刻み目を施す。Ⅲ154は口径約12cm。口縁端部が小さく外折し，鍔は水平に突出する。

Ⅲ156・Ⅲ157は瓦器皿。口縁部に撫でを施し，暗文はみられない。Ⅲ158・Ⅲ159・Ⅲ162は瓦器椀。見込みに蛇行する暗文を施し，高台は断面三角形の形状を示す。Ⅲ160は瓦器小椀。篦によって５輪花の形状を表現している。Ⅲ161は瓦器の三足付のミニチュア羽釜。口縁部外面には篦磨きを施し，鍔上面の３箇所に花弁様の文様を描く。Ⅲ163は白磁口禿の皿。Ⅲ164・Ⅲ165は白磁椀。Ⅲ164は口縁が外に折れる。Ⅲ165は口禿の椀。内面に沈線がある。Ⅲ166～Ⅲ168は青磁椀。ともに鎬蓮弁文を施す。

Ⅲ169は須恵器すり鉢。口縁部の下端は，やや拡張している。Ⅲ170は灰釉系陶器皿。底部に糸切り痕を残す。Ⅲ171は須恵器壷。口縁が直立している。Ⅲ172は瓦器羽釜。Ⅲ173・Ⅲ174は瓦器鍋。口縁端部は屈曲があまく，斜めに立ち上がる。Ⅲ174の底部は丸味を帯びている。Ⅲ175・Ⅲ176は石鍋。Ⅲ175は鍔をもつ。Ⅲ177は瓦器把手。把手付き鍋の一部とみられる。把手の端部は下に屈曲する。Ⅲ178は瓦器盤。これらは，ＳＤ132とともに，13世紀中葉～後葉を中心とする時期の資料と考えられる。

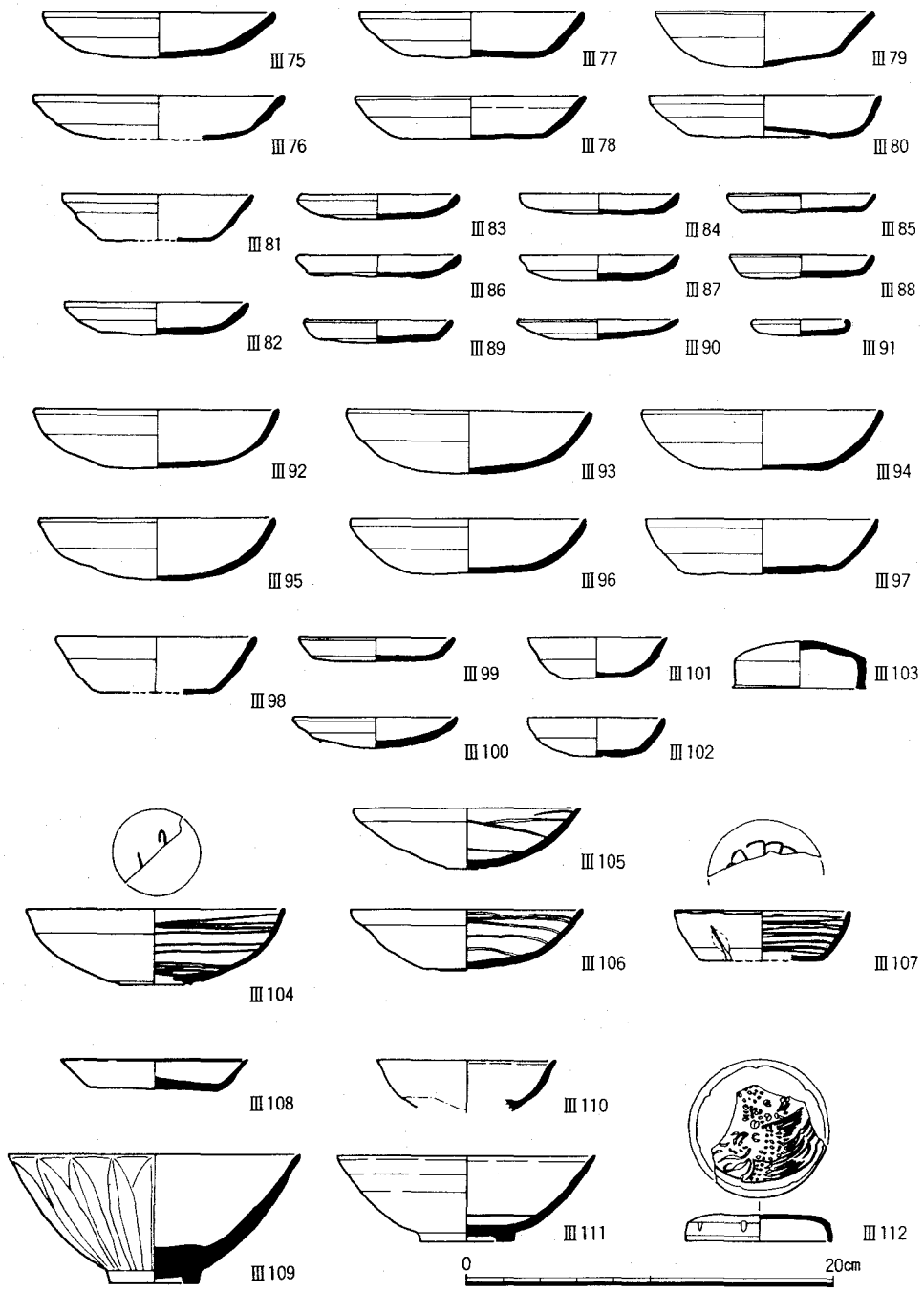


図25　ＳＤ132出土遺物(1)（Ⅲ75～Ⅲ103土師器，Ⅲ104～Ⅲ107瓦器，Ⅲ108・Ⅲ110・Ⅲ111白磁，Ⅲ109青磁，Ⅲ112青白磁）

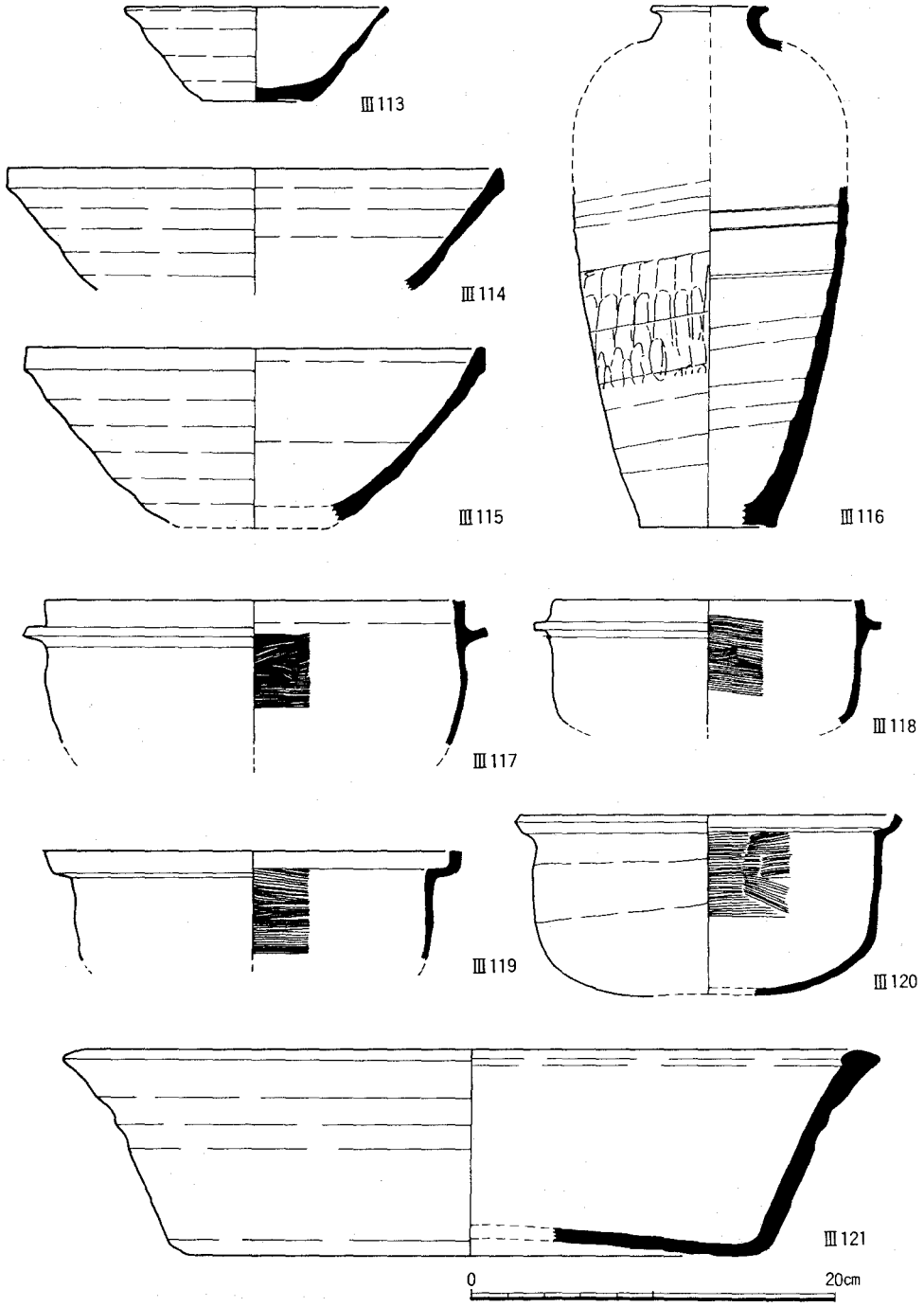


図26　ＳＤ132出土遺物(2)(Ⅲ113灰釉系陶器,Ⅲ114・Ⅲ115須恵器,Ⅲ116褐釉陶器,Ⅲ117～Ⅲ121瓦器)

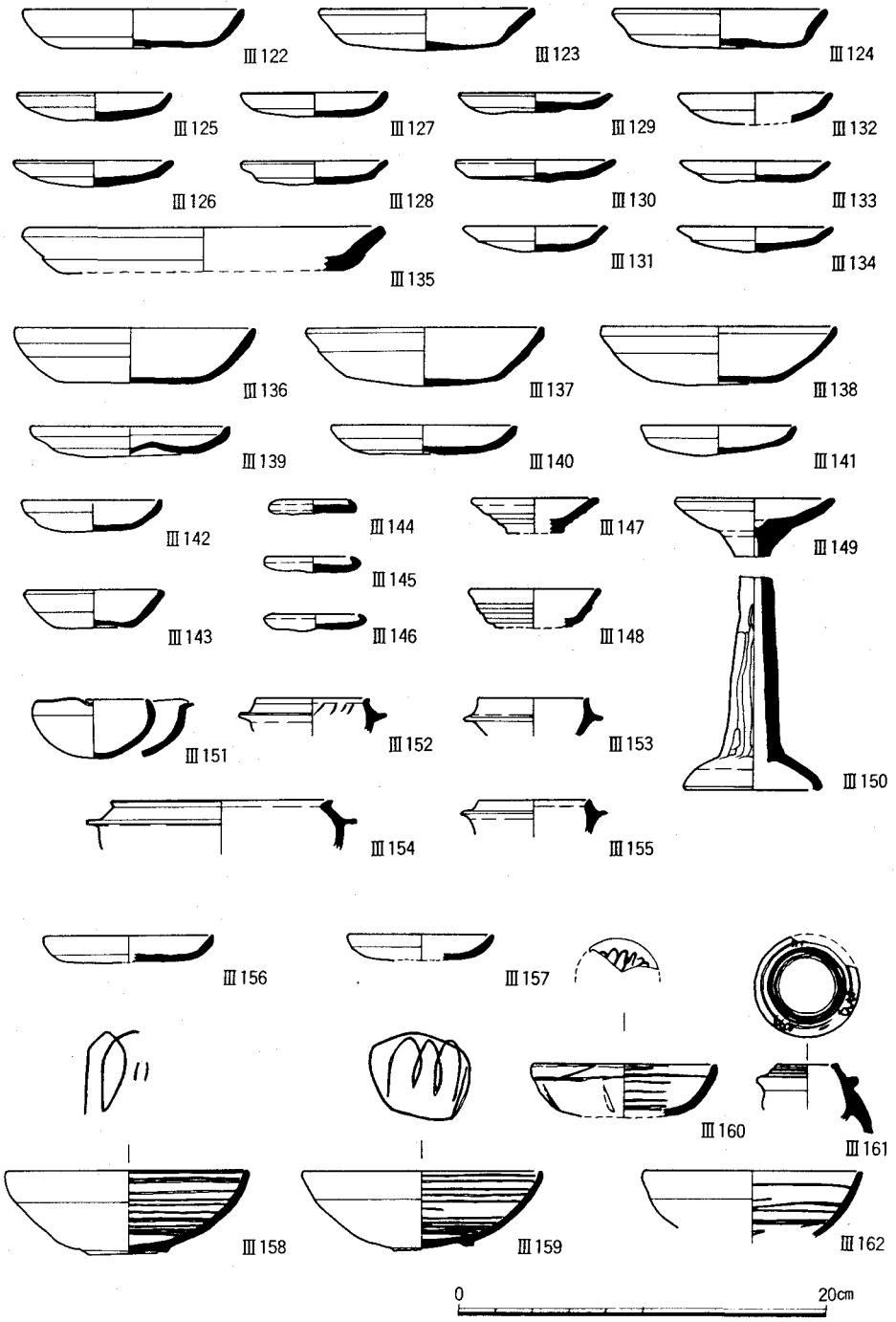


図27　ＳＤ130出土遺物(1)（Ⅲ122～Ⅲ155土師器，Ⅲ156～Ⅲ162瓦器）

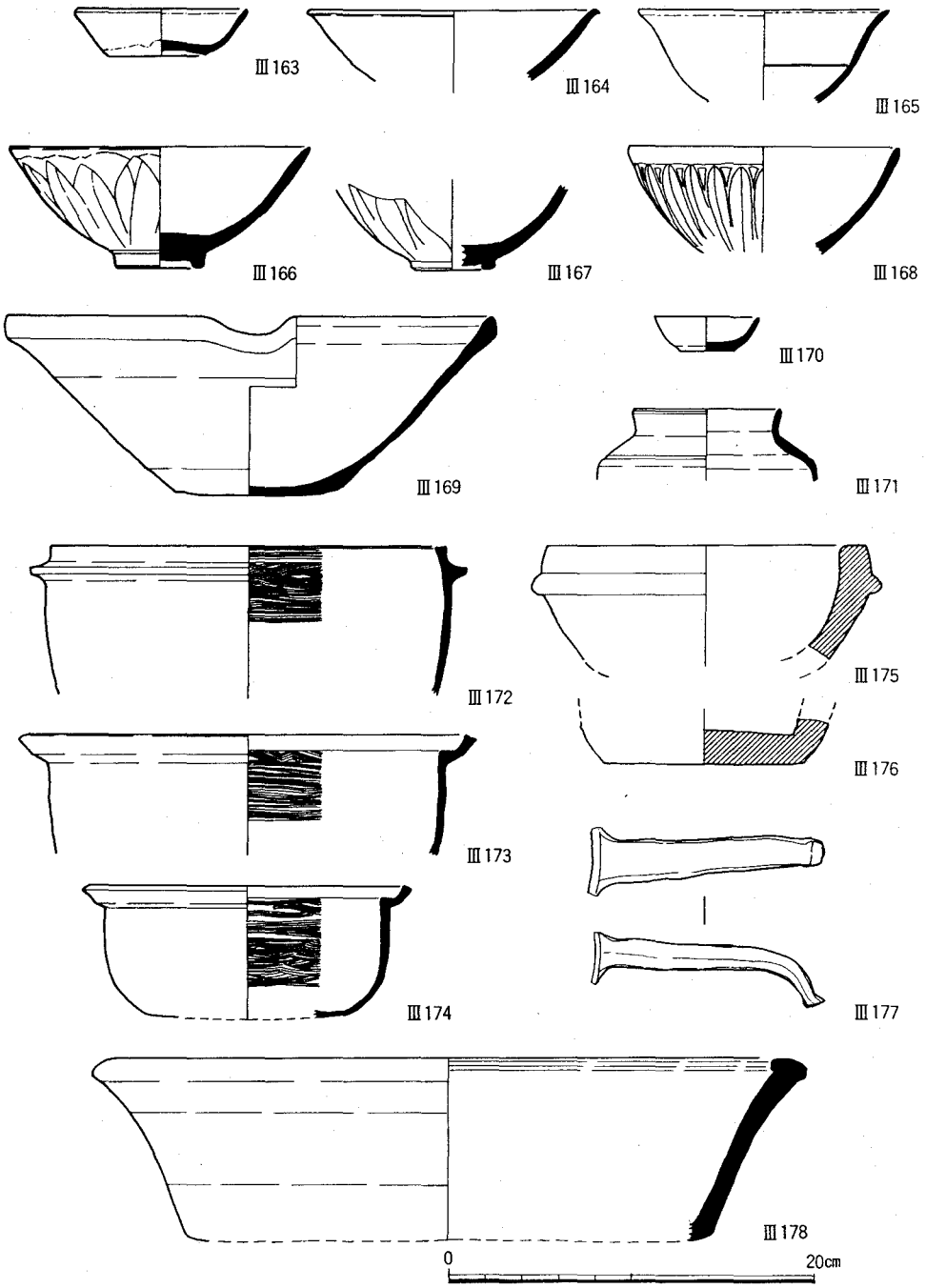


図28　ＳＤ130出土遺物(2)（Ⅲ163～Ⅲ165白磁，Ⅲ166～Ⅲ168青磁，Ⅲ169・Ⅲ171須恵器，Ⅲ170灰釉系陶器，Ⅲ172～Ⅲ174・Ⅲ177・Ⅲ178瓦器，Ⅲ175・Ⅲ176石鍋）

ＳＥ４出土遺物（III179～III206）　III179～III188は赤褐色の土師器皿，III189～III195は灰白色の土師器椀。III179～III183は皿ＡＩ，D_6類である。皿ＡＩは12cmにピークがあり，D_6類が８割，D_5類が１割をしめる。III184～III188は皿ＡII。III185・III188はD_5類，III186・III187はE_1類。D_5類が過半数をしめ，E_1類がこれに次ぐ。８cmにピークがある。III189・III190は椀ＡＩ。ともにD_5類である。口径は13cmにピークがある。III191～III195は椀ＡII。III191・III194はD_5類，III192・III193・III195はE_1類。E_1類が６割，D_5類が４割をしめ，口径は９cmのものが多い。III196～III199は瓦器の小型椀。灰白色を呈する。III200は瓦器の小椀。底部に菊花状の暗文を施す。III201は青白磁の脚部。楕円形の透かしが付き円筒形状を示す。III202は龍泉窯系青磁椀。内面に菊花状の文様をもち，口縁部が屈曲する。III203は小型の滑石製硯。III204は灰釉系陶器鉢。口縁部は６弁の輪花状に作りだす。III205は瓦器小型羽釜を３個連結したもの。脚は各羽釜に１個ずつ付く。III206は須恵器すり鉢。口縁は上下に少し拡張する。13世紀後葉ごろの良好な資料である。

ＳＫ62出土遺物（III207～III227）　III207～III213は土師器皿。III207～III210はD_6類。皿ＡＩでは12cmにピークがあり，D_6類が過半数をしめ，D_5類とE_1類がこれにつづく。III211はD_5類，III212・III213はE_1類。皿ＡIIでは８cmにピークがあり，E_1類とD_5類が主体をなす。III214～III219は土師器椀。III214・III215はD_5類，III216はE_1類。椀ＡＩでは12～13cmにピークがあり，D_5類が７割をしめ，その他はE_1類である。III217～III219はE_1類。椀ＡIIでは８cmにピークがあり，E_1類が圧倒的多数をしめる。III220は受皿。III221は土師器高杯。ともに灰白色を呈する。III222～III225は白磁。III222・III225は口禿の皿。III223・III224は合子の蓋。型押しによって草花や唐草，飛雲などの文様を付す。III226は鎬連弁文青磁椀。III227は鍔付きの滑石製鍋。これらは，13世紀後葉～14世紀前葉ごろの資料である。

ＳＫ41出土遺物（III228～III243）　III228～III235は土師器皿。III228はD_6類。皿ＡＩでは，12cmにピークがあり，D_6類が主体をなす。III229～III232・III234・III235はE_1類，III233はD_5類。皿ＡIIでは，８～９cmにピークがあり，E_1類が過半数をしめ，D_5類がつづく。III236～III240は土師器椀。III236はD_5類，椀ＡＩでは，12～13cmにピークがあり，D_5類とE_1類がほぼ半数ずつある。III237・III238・III240はE_1類，III239はD_5類。椀ＡIIでは，７～８cmにピークがあり，E_1類が７割をしめ，D_5類そしてE_2類がつづく。III241は瓦器椀。内面にやや粗雑な篦磨きを施す。III242青磁椀。口縁端部はやや外反する。III243は瓦器盤。口縁は外反し，その端部は内外に拡張する。これらは14世紀前葉ごろの資料である。

ＳＫ43出土遺物（Ⅲ244～Ⅲ271）　図示したⅢ244～Ⅲ271はすべて土師器。Ⅲ244～Ⅲ253は皿。Ⅲ244・Ⅲ245はD_6類，Ⅲ246～Ⅲ248はE_1類，Ⅲ249はE_2類。皿ＡⅠでは12cmにピークがあり，E_1類が過半数をしめ，D_6類，E_2類，E_3類とつづく。Ⅲ250～Ⅲ253はE_1類。皿ＡⅡでは，８cmにピークがあり，E_1類が大半をしめる。Ⅲ254～Ⅲ271は椀。Ⅲ256～Ⅲ259はE_1類，Ⅲ254・Ⅲ255はE_2類。椀ＡⅠでは，13cmにピークがあり，E_1類とE_2類が拮抗する。Ⅲ260～Ⅲ268はE_1類，Ⅲ269～Ⅲ271はE_2類。椀ＡⅡでは，８cmにピークがあり，E_1類とE_2類が拮抗している。14世紀中葉ごろの資料である。

ＳＫ67出土遺物（Ⅲ272～Ⅲ295）　Ⅲ272～Ⅲ293は土師器。Ⅲ272～Ⅲ277は皿。Ⅲ272は皿ＡⅠよりも大型の皿。口縁形態はD_5類。Ⅲ273はE_1類。皿ＡⅠでは，11cmにピークがあり，E_1類が大半をしめ，E_2類がつづく。Ⅲ274～Ⅲ277はE_1類。皿ＡⅡでは，８cmにピークがあり，すべてE_1類である。Ⅲ278～Ⅲ292は椀。Ⅲ278～Ⅲ281はE_1類。椀ＡⅠでは，11～12cmにピークがあり，E_1類とE_2類が拮抗する。Ⅲ282～Ⅲ286・Ⅲ288～Ⅲ290・Ⅲ292はE_1類，Ⅲ287・Ⅲ291はE_2類。椀ＡⅡでは，８cmにピークがあり，E_1類とE_2類がほぼ拮抗する。Ⅲ293はミニチュアの羽釜。灰白色を呈する。Ⅲ294は瓦器椀。Ⅲ295は灰釉系陶器椀。口縁はゆるく外反する。これらは14世紀中葉ごろの資料である。

ＳＫ66出土遺物（Ⅲ296～Ⅲ319）　Ⅲ296～Ⅲ318は土師器。Ⅲ296～Ⅲ300は皿。Ⅲ296はE_2類。皿ＡⅠは12cmにピークをもち，E_1類が主体をなし，E_1類，E_3類などがつづく。Ⅲ297～Ⅲ300はE_1類。皿ＡⅡは８cmにピークがあり，すべてE_1類である。Ⅲ301は高杯の杯部。灰白色を呈する。Ⅲ302～Ⅲ315は椀Ａ。Ⅲ302・Ⅲ304・Ⅲ305はE_1類，Ⅲ303・Ⅲ306はE_2類。椀ＡⅠでは12cmにピークがあり，E_2類が６割をしめ，その他はE_1類である。Ⅲ307～Ⅲ311はE_1類，Ⅲ312～Ⅲ315はE_2類。８cmにピークがあり，椀ＡⅡでもE_2類がE_1類をうわまわる量を示す。Ⅲ316～Ⅲ318は椀形の土師器。Ⅲ302～Ⅲ306などと異なって赤褐色を呈し，体部から底部にかけて丸みをおびる形状をなす。Ⅲ319は瓦器火鉢。輪花状をなす。内外面に篦磨きを施す。14世紀中葉ごろの資料である。

ＳＫ58出土遺物（Ⅲ320～Ⅲ342）　図示したⅢ320～Ⅲ342はすべて土師器。Ⅲ320～Ⅲ326は皿Ａ。Ⅲ320はE_2類。Ⅲ321・Ⅲ322はE_1類。皿ＡⅠでは12cmにピークがあり，E_1類が主体をなす。Ⅲ323～Ⅲ326はE_1類。皿ＡⅡはすべてE_1類である。Ⅲ327～Ⅲ342は椀。Ⅲ327・Ⅲ329・Ⅲ330・Ⅲ332はE_2類，Ⅲ328・Ⅲ331はE_1類。椀ＡⅠではE_2類が95％をしめ，その他はE_1類である。Ⅲ333～Ⅲ336・Ⅲ338～Ⅲ342はE_2類，Ⅲ337はE_3類。椀ＡⅡでは，８cmにピークがあり，E_2類が８割をしめる。14世紀中葉ごろの資料である。

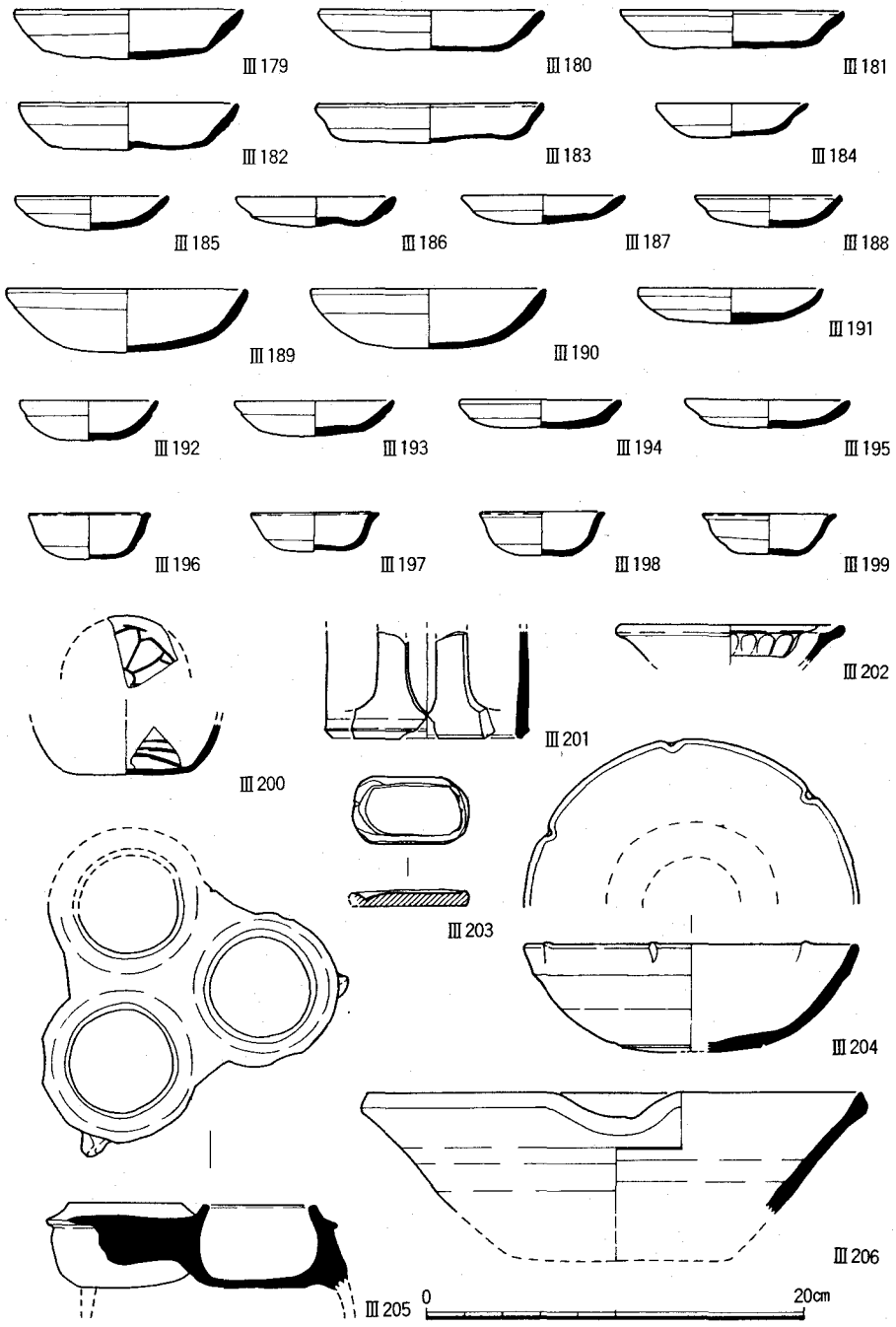


図29　ＳＥ４出土遺物（Ⅲ179～Ⅲ195土師器，Ⅲ196～Ⅲ200・Ⅲ205瓦器，Ⅲ201青白磁，Ⅲ202青磁，Ⅲ203石硯，Ⅲ204灰釉系陶器，Ⅲ206須恵器）

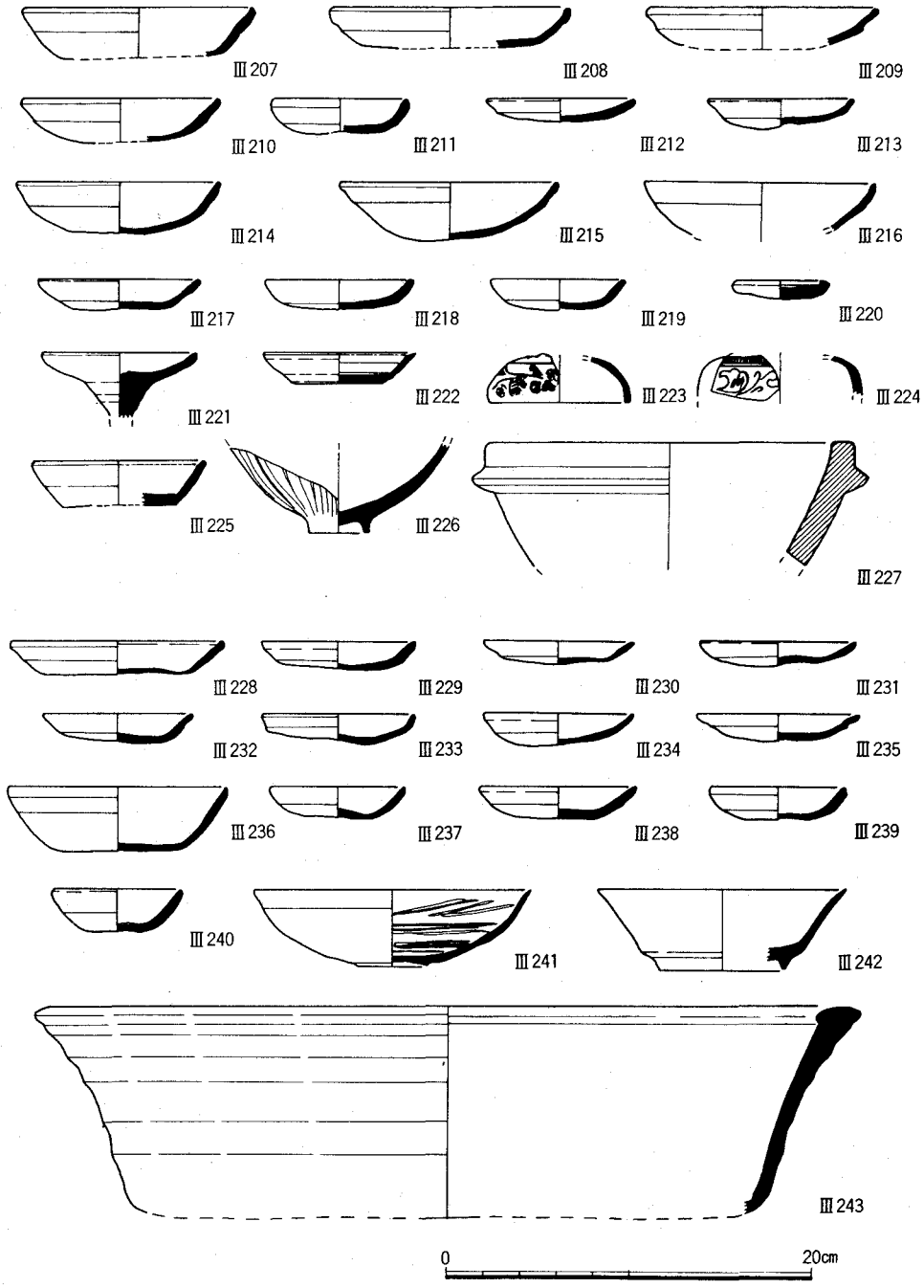


図30　ＳＫ62出土遺物（Ⅲ207～Ⅲ221土師器，Ⅲ222～Ⅲ225白磁，Ⅲ226青磁，Ⅲ227石鍋），
ＳＫ41出土遺物（Ⅲ228～Ⅲ240土師器，Ⅲ241・Ⅲ243瓦器，Ⅲ242青磁）

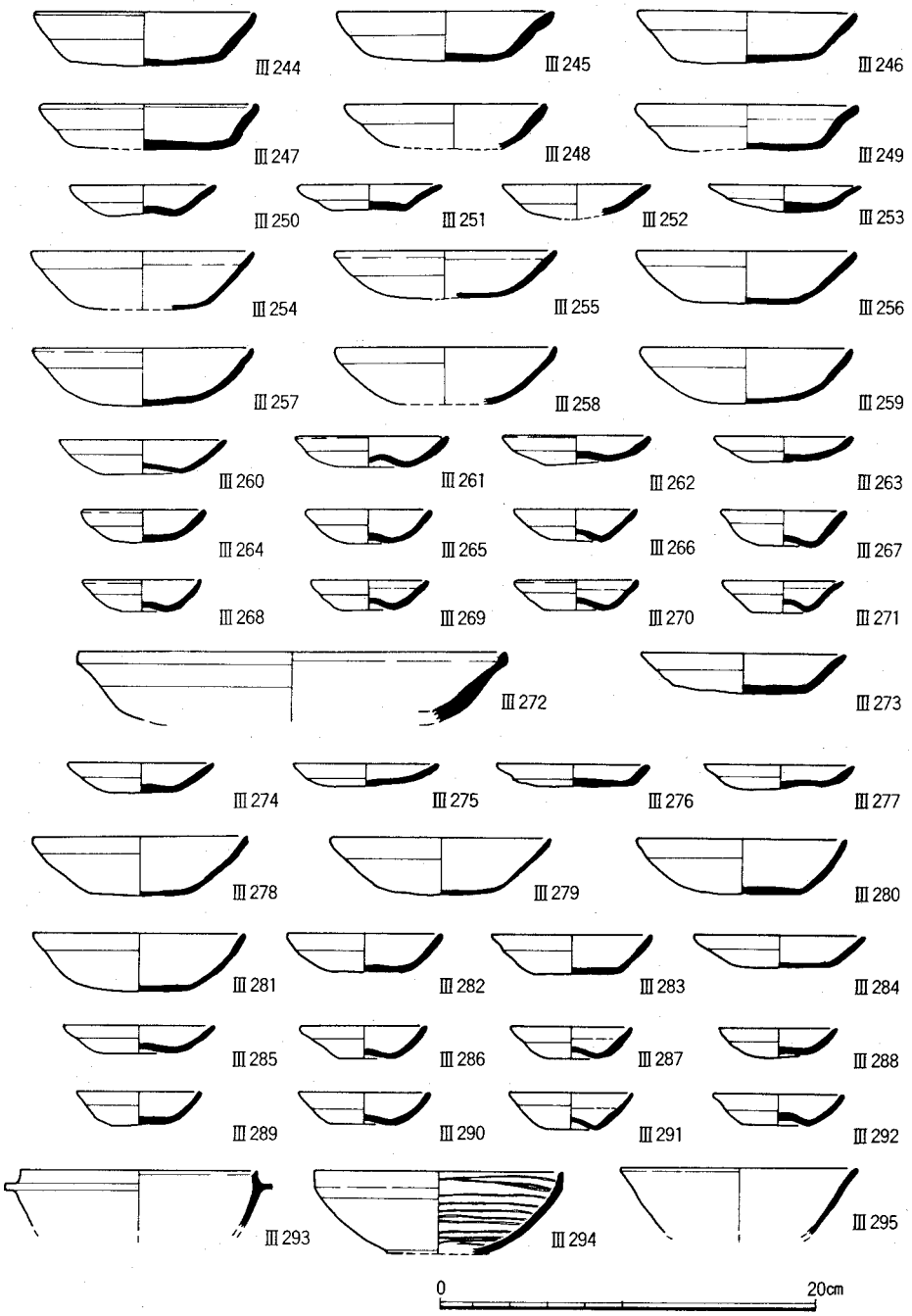


図31　ＳＫ43出土遺物（Ⅲ244～Ⅲ271土師器），ＳＫ67出土遺物（Ⅲ272～Ⅲ293土師器，Ⅲ294瓦器，Ⅲ295灰釉系陶器）

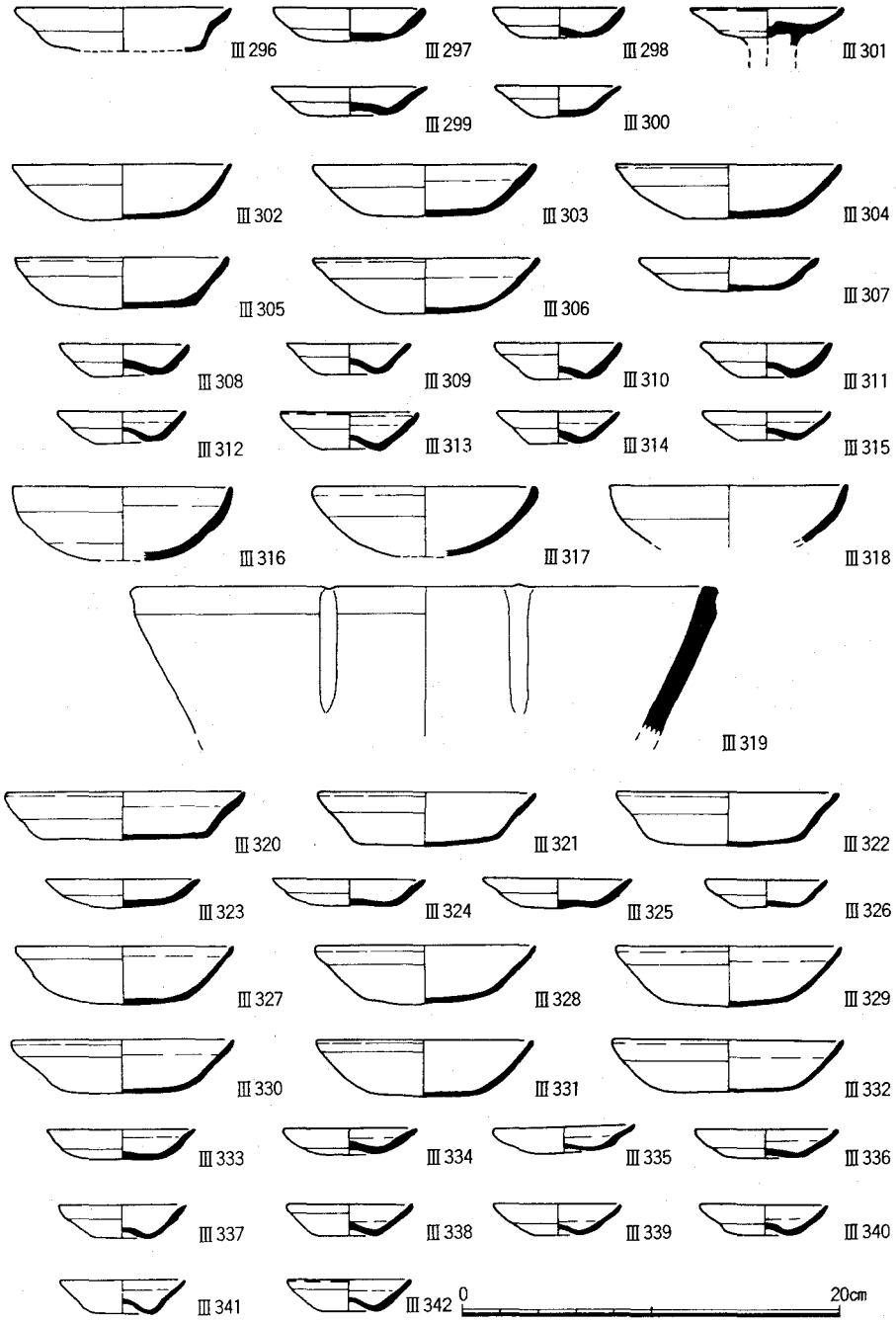


図32　ＳＫ66出土遺物（Ⅲ296～Ⅲ318土師器，Ⅲ319瓦器），
ＳＫ58出土遺物（Ⅲ320～Ⅲ342土師器）

表１　出土土器計測結果(1)

土師器口縁部形態の比率

ＳＫ７	皿ＡⅡ	皿ＡⅠ
	39.2個体	18.9個体
C_3類	54.6%	39.6%
C_4類	29.6%	56.9%
C_5類	2.6%	1.3%
D_3類	12.8%	
D_4類	0.4%	2.2%
合 計	100.0%	100.0%

ＳＤ132	皿ＡⅡ	皿ＡⅠ	椀ＡⅡ	椀ＡⅠ
	50.3個体	18.6個体	4.3個体	15.7個体
D_2類	38.6%			
D_3類	2.2%			
D_4類	2.3%	3.6%		
D_5類	54.3%	56.0%	100.0%	100.0%
D_6類		38.6%		
E_1類	2.6%	1.8%		
合 計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

ＳＤ130	皿ＡⅡ	皿ＡⅠ	椀ＡⅡ	椀ＡⅠ
	30.0個体	18.1個体	5.9個体	14.3個体
D_2類	11.3%	0.9%		
D_3類		3.2%		
D_4類	0.6%	8.8%		
D_5類	59.9%	57.1%	78.9%	94.2%
D_6類		30.0%		
E_1類	28.2%		21.1%	5.8%
合 計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

ＳＥ４	皿ＡⅡ	皿ＡⅠ	椀ＡⅡ	椀ＡⅠ
	13.6個体	8.2個体	6.8個体	2.2個体
D_5類	59.5%	12.2%	35.8%	100.0%
D_6類	1.2%	81.7%		
E_1類	39.3%	4.1%	64.2%	
E_2類		2.0%		
合 計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

ＳＫ62	皿ＡⅡ	皿ＡⅠ	椀ＡⅡ	椀ＡⅠ
	12.5個体	3.7個体	2.6個体	6.6個体
D_4類	1.3%			
D_5類	42.0%	34.1%	6.5%	77.2%
D_6類		50.0%		
E_1類	56.7%	11.4%	93.5%	22.8%
E_2類		4.5%		
合 計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

種類別の比率

ＳＫ７	
	59.5個体
土師器（皿）	99.2%
瓦器（椀）	0.8%
合　計	100.0%

ＳＤ132	
	101.8個体
土師器（皿・椀）	89.4%
瓦器（皿・椀）	4.4%
瓦器（鍋・羽釜・盤）	3.3%
須恵器（すり鉢）	0.7%
灰釉陶器（椀）	0.6%
輸入陶磁器（皿・椀）	1.6%
合　計	100.0%

ＳＤ130	
	92.4個体
土師器（皿・椀）	87.0%
瓦器（皿・椀）	5.4%
瓦器（鍋・羽釜・盤）	3.4%
須恵器（すり鉢）	1.1%
灰釉陶器（皿・椀）	0.3%
輸入陶磁器（皿・椀）	2.8%
合　計	100.0%

ＳＥ４	
	37.0個体
土師器（皿・椀）	83.2%
瓦器（椀）	12.4%
瓦器（羽釜）	2.2%
須恵器（すり鉢）	2.2%
合　計	100.0%

ＳＫ62	
	29.3個体
土師器（皿・椀）	96.1%
輸入陶磁器（皿・椀）	3.9%
合　計	100.0%

土師器口径の度数分布

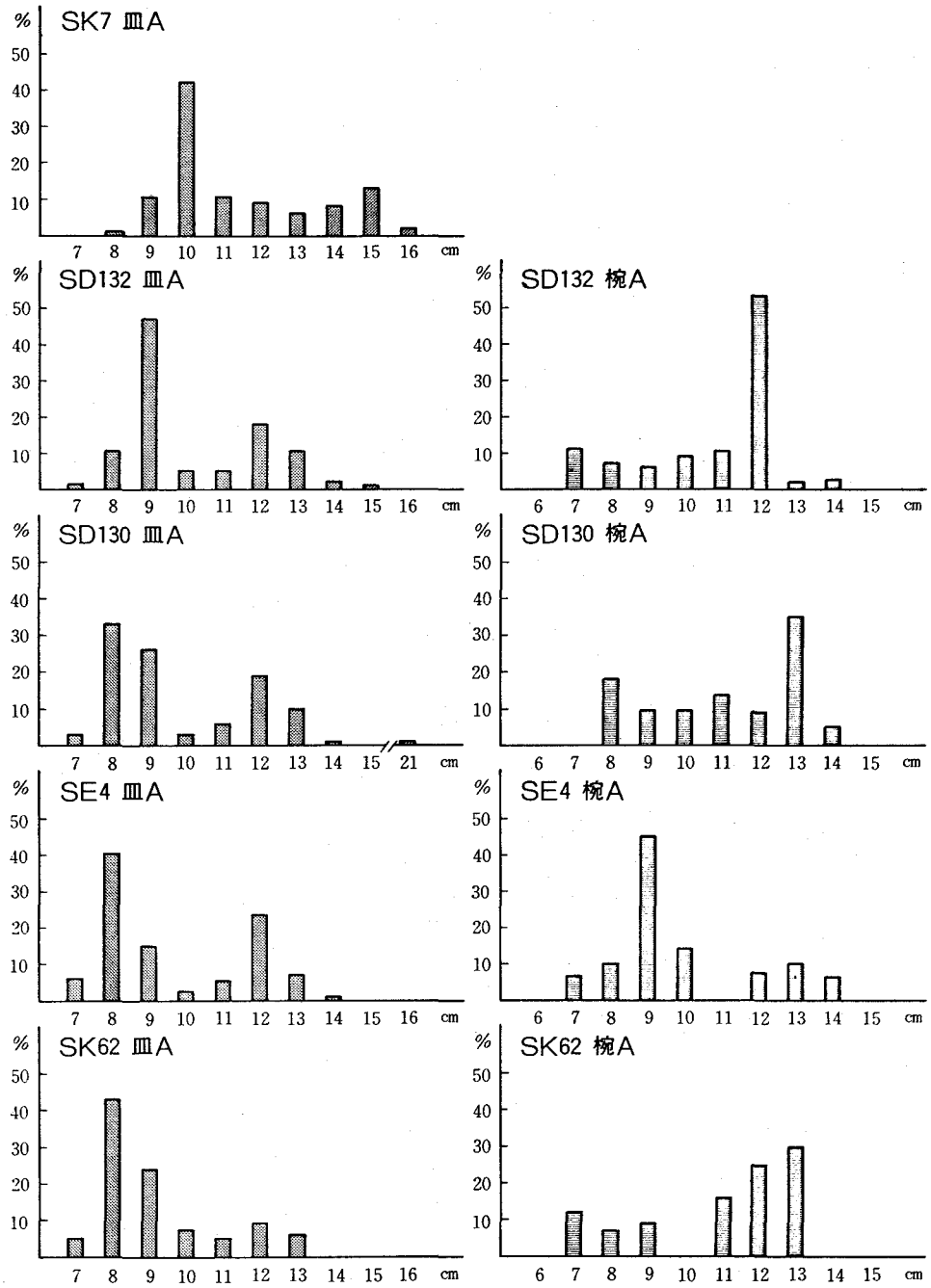

SK7 皿A
SD132 皿A
SD132 椀A
SD130 皿A
SD130 椀A
SE4 皿A
SE4 椀A
SK62 皿A
SK62 椀A
%
cm

表２　出土土器計測結果(2)

土師器口縁部形態の比率

ＳＫ41	皿ＡⅡ	皿ＡⅠ	椀ＡⅡ	椀ＡⅠ
	17.7個体	6.3個体	5.3個体	3.3個体
D_5類	38.2%	10.7%	17.2%	55.0%
D_6類	1.9	81.3%		
E_1類	59.9%	8.0%	71.9%	45.0%
E_2類			10.9%	
合 計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

ＳＫ43	皿ＡⅡ	皿ＡⅠ	椀ＡⅡ	椀ＡⅠ
	10.5個体	23.5個体	79.6個体	22.9個体
D_5類	1.6%			
D_6類		17.0%		
E_1類	88.1%	61.1%	42.9%	58.2%
E_2類		14.5%	54.1%	41.8%
E_3類	10.3%	7.4%		
E_4類			3.0%	
合 類	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

ＳＫ67	皿ＡⅡ	皿ＡⅠ	椀ＡⅡ	椀ＡⅠ
	7.1個体	4.6個体	30.7個体	14.1個体
E_1類	100.0%	80.0%	41.0%	41.4%
E_2類		20.0%	59.0%	58.6%
合 計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

ＳＫ66	皿ＡⅡ	皿ＡⅠ	椀ＡⅡ	椀ＡⅠ
	2.0個体	11.8個体	46.0個体	18.2個体
E_1類	100.0%	67.0%	29.2%	38.5%
E_2類		19.0%	69.7%	61.5%
E_3類		7.7%		
E_4類		6.3%	1.1%	
合 計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

ＳＫ58	皿ＡⅡ	皿ＡⅠ	椀ＡⅡ	椀ＡⅠ
	9.0個体	12.2個体	40.9個体	7.3個体
E_1類	100.0%	61.0%	18.5%	4.6%
E_2類		36.3%	81.5%	95.4%
E_3類		2.7%		
合 計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

種類別の比率

ＳＫ41	
	33.6個体
土師器（皿・椀）	97.6%
瓦器（椀）	1.5%
瓦器（盤）	0.3%
輸入陶磁器（椀）	0.6%
合　計	100.0%

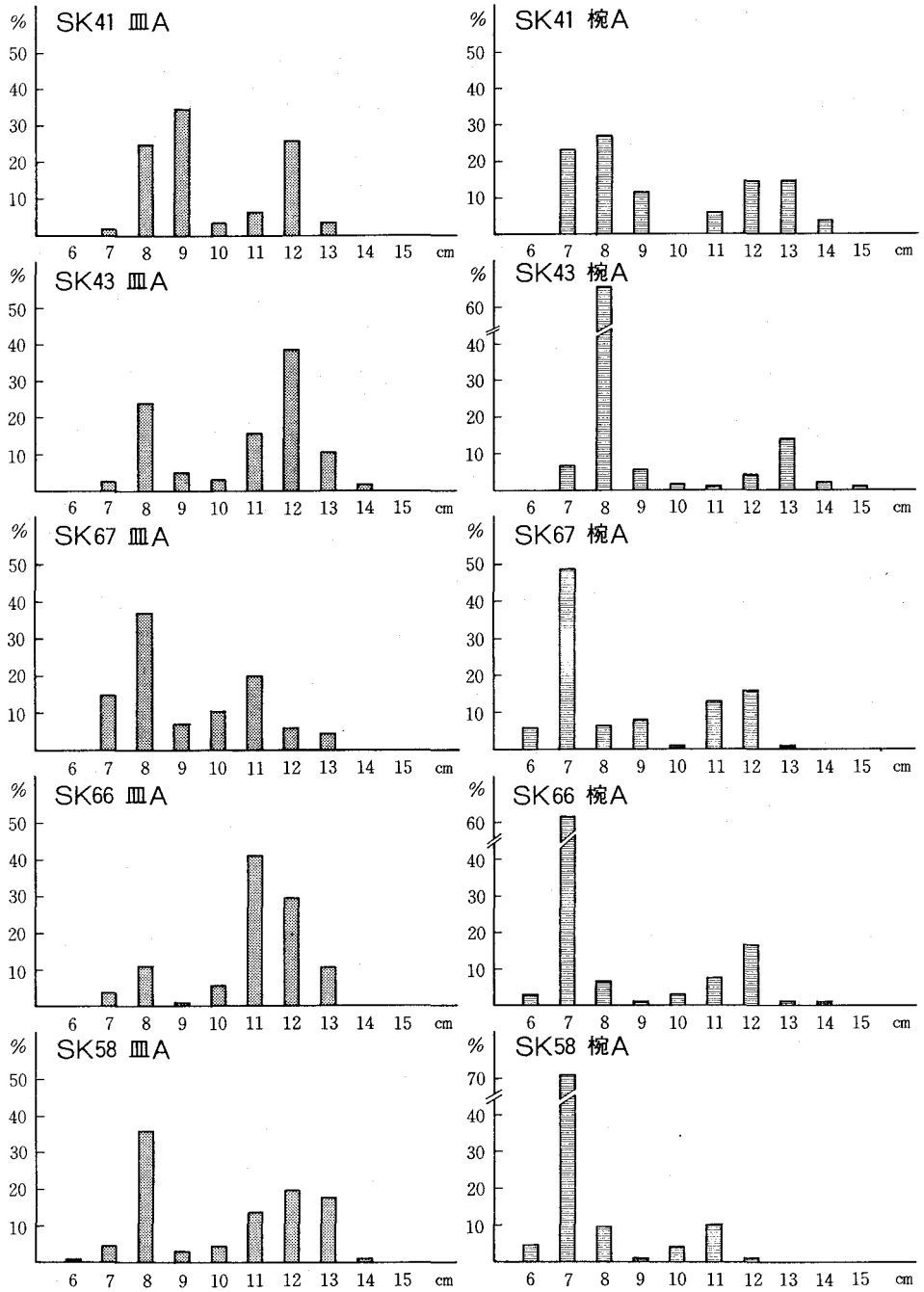
ＳＫ43	
	145.6個体
土師器（皿・椀）	93.7%
瓦器（鍋）	6.3%
合　計	100.0%

ＳＫ67	
	58.9個体
土師器（皿・椀）	97.8%
瓦器（椀）	1.2%
瓦器（鍋・盤）	0.5%
灰釉陶器（椀）	0.5%
合　計	100.0%

ＳＫ66	
	80.9個体
土師器（皿・椀）	99.5%
瓦器（鍋・火鉢）	0.4%
須恵器（すり鉢）	0.1%
合　計	100.0%

ＳＫ58	
	69.4個体
土師器（皿・椀）	100.0%
合　計	100.0%

土師器口径の度数分布


SK41 皿A
SK41 椀A
SK43 皿A
SK43 椀A
SK67 皿A
SK67 椀A
SK66 皿A
SK66 椀A
SK58 皿A
SK58 椀A
%
cm
6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

黄灰色砂質土出土遺物(Ⅲ343～Ⅲ356)　Ⅲ343～Ⅲ347は土師器。Ⅲ343は赤褐色を呈する皿Ａ。Ⅲ344は轆轤成形による土師器の椀。灰白色を呈する。Ⅲ345・Ⅲ346は椀Ａ。ともに灰白色を呈する。Ⅲ347は受皿。これも灰白色を呈する。Ⅲ348・Ⅲ349は瓦器皿。Ⅲ350は瓦器椀。見込みに鋸歯状の暗文を施す。Ⅲ351は瓦器小椀。篦によって体部を５輪花に形成し，見込みに格子状暗文を施す。Ⅲ352は瓦器の壷。口縁部の上面には円弧，肩部に円弧と花弁様の暗文をそれぞれ施す。Ⅲ353は瓦器小型椀。底部に断面三角形の高台がつく。Ⅲ354は白磁の皿。底は扁平で露胎。Ⅲ355は青磁皿。口縁は小さい玉縁状をなし，体部下半は露胎である。Ⅲ356は黄釉陶器盤。口縁は玉縁状をなし，外面上半から内面全体に黄釉を施し，内底面に鉄絵を描く。13世紀後葉ごろから14世紀中葉ごろにおよぶ資料である。

暗赤褐色土出土遺物（Ⅲ357～Ⅲ378）　Ⅲ357～Ⅲ365は土師器。Ⅲ357～Ⅲ359は赤褐色を呈する皿Ａ。Ⅲ360は高台付きの受皿。これも赤褐色を呈する。Ⅲ361～Ⅲ364は灰白色の椀Ａ。Ⅲ365は片口の椀。灰白色を呈する。Ⅲ366は瓦器椀。Ⅲ367は瓦器壷。口縁端部外面に，小さい段があり，あるいは蓋と組み合う可能性もある。Ⅲ368は瓦器三足付羽釜。肩部に突帯をもうけている。Ⅲ369～Ⅲ371は白磁。Ⅲ369は口禿の皿。Ⅲ370は椀の底部と推定される。Ⅲ371は合子の身。印籠式の受部に花弁状の凹凸のある体部がつづく。Ⅲ372は天目の椀。Ⅲ373～Ⅲ376は灰釉系陶器。Ⅲ373～Ⅲ375は皿。Ⅲ373の体部は稜をなし，Ⅲ375には片口がつく。Ⅲ376は壷の口頸部。端部がすこし屈曲する。Ⅲ377は青磁。不定形のすかし穴がみられ，香炉の蓋の一部ではないかと推定される。Ⅲ378は須恵器すり鉢。口縁端部は上下に大きく拡張する。これらは13～14世紀中葉ごろの遺物である。

赤褐色土出土遺物（Ⅲ379～Ⅲ387）　出土遺物には，13～14世紀の土師器も包含されているが，ごく少量ながら以下に説明する資料が出土した。これらが，この層位の形成された時代を示すものと考えられる。なお，陶磁器類は非常に少ない。Ⅲ379～Ⅲ387は土師器皿。その口縁形態はⅢ379・Ⅲ380・Ⅲ383・Ⅲ385・Ⅲ387は F_4類，Ⅲ381・Ⅲ382・Ⅲ384・Ⅲ386は F_3類を示す。15世紀後半～16世紀前半の資料とみられる。

灰褐色土出土遺物（Ⅲ388～Ⅲ406）　上記の赤褐色土と同様に，図示した遺物のほかに中世前半の遺物も含まれている。Ⅲ388～Ⅲ399は土師器。Ⅲ388・Ⅲ391・Ⅲ399は F_4類，Ⅲ389・Ⅲ390・Ⅲ392～Ⅲ398は F_3類を示す。これらは，16世紀前葉ごろの資料と考えられる。Ⅲ400・Ⅲ401は天目の椀。Ⅲ402・Ⅲ403は灰釉系陶器。Ⅲ402はおろし皿。Ⅲ403は鉢。内面側の口縁端部が突出する。Ⅲ404～Ⅲ406は瓦器風炉。菅原正明の分類によれば，Ⅲ404はＥ型，Ⅲ405はＣ型であり，中世後半の奈良産とみられる〔菅原89〕。

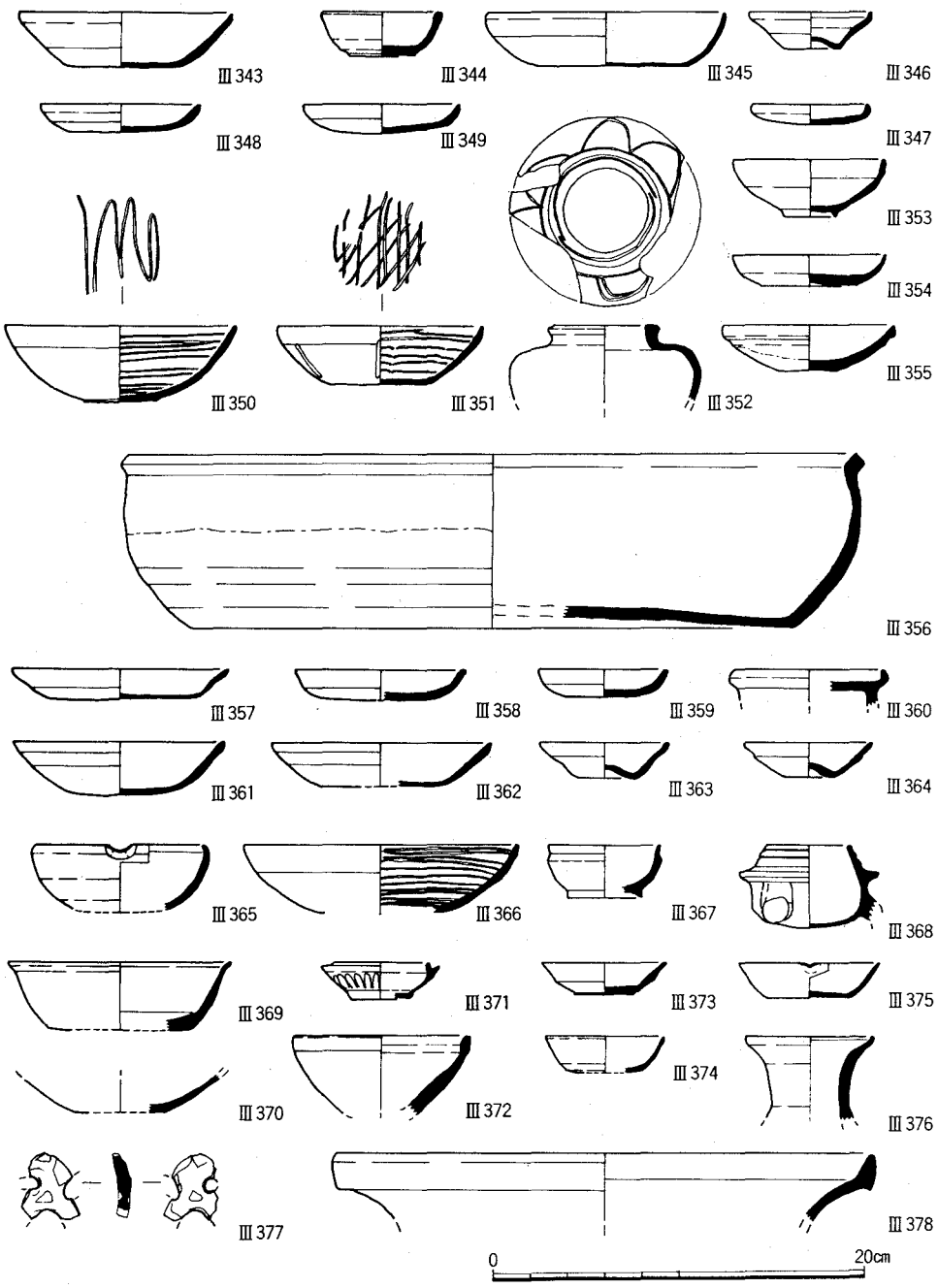


図33 黄灰色砂質土出土遺物（Ⅲ343～Ⅲ347土師器，Ⅲ348～Ⅲ353瓦器，Ⅲ354白磁，Ⅲ255青磁，Ⅲ356黄釉陶器），暗赤褐色土出土遺物（Ⅲ357～Ⅲ365土師器，Ⅲ366～Ⅲ368瓦器，Ⅲ369～Ⅲ371白磁，Ⅲ372天目，Ⅲ373～Ⅲ376灰釉系陶器，Ⅲ377青磁，Ⅲ378須恵器）

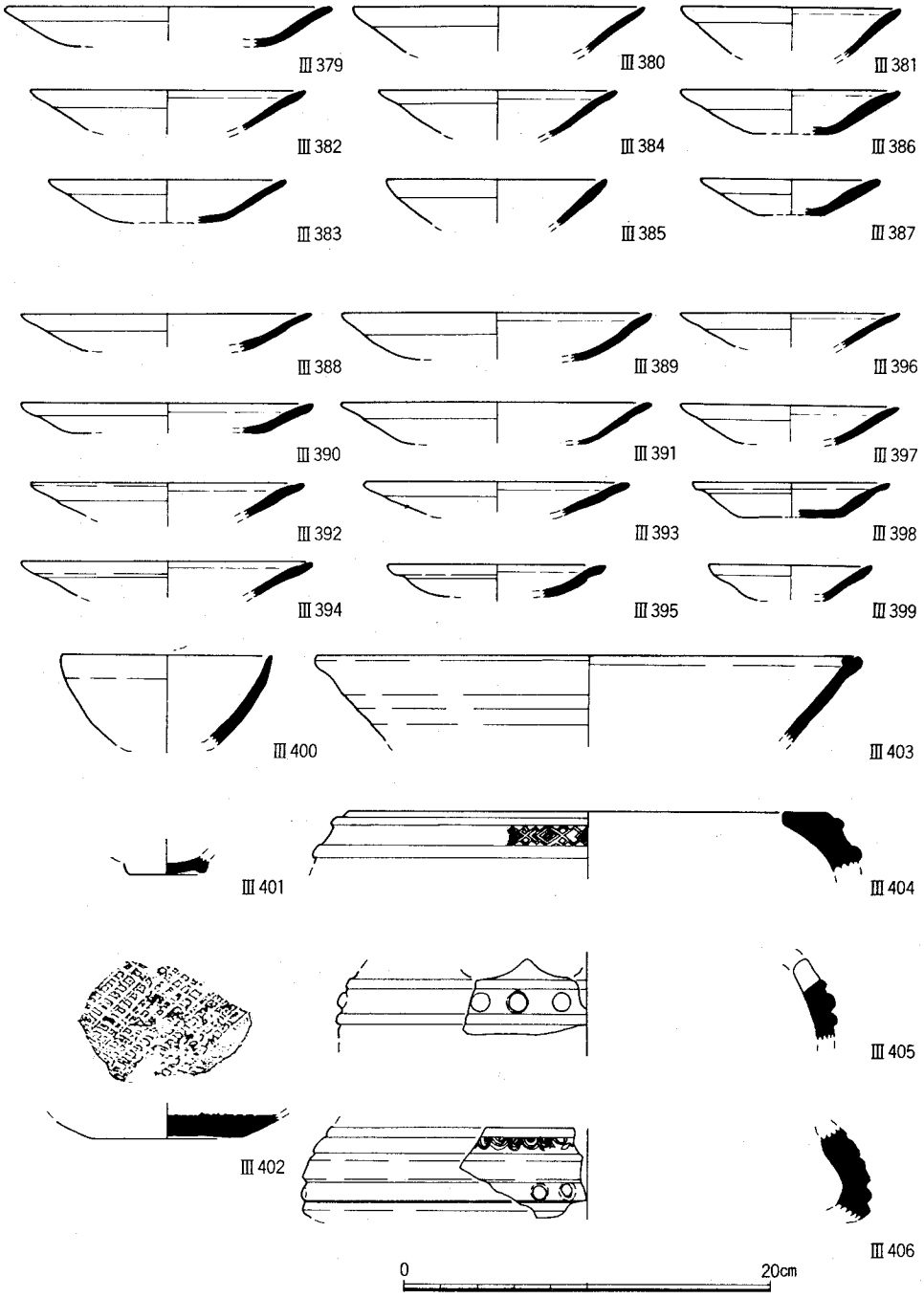


図34　赤褐色土出土遺物（Ⅲ379～Ⅲ387土師器），灰褐色土出土遺物（Ⅲ388～Ⅲ399土師器，Ⅲ400・Ⅲ401天目，Ⅲ402・Ⅲ403灰釉系陶器，Ⅲ404～Ⅲ406瓦器）

墨書土器（Ⅲ407～Ⅲ414）　墨書土器は，特定の遺構からまとまって出土したものはなく，井戸，溝，土坑，包含層などの各種の遺構からごく少量ずつ出土した。それらの詳しい出土遺構・層位に関しては，図35の説明を参照されたい。Ⅲ407～Ⅲ409は赤褐色の土師器。Ⅲ410・Ⅲ411・Ⅲ413・Ⅲ414は灰白色を呈する土師器である。

Ⅲ407は内面に戯画様のものと文字らしきものがみえ，文字は「人□土」と読める。外面は戯画を描いた後，傍線を引いて消した可能性がある。土取りによって形成された不定形土坑の埋土から出土している。中世の陰陽道信仰において，土公神と呼ばれる土をつかさどる神がある。そして，この神が土中にいる時期に土を犯したり，この神の遊行の方向にむかって土木工事をおこなうことは厳しく慎む必要があり，しばしば地鎮の祭祀がおこなわれている。Ⅲ407の資料は，あるいは，この地でおこなわれた土取りに関わる祭祀に使用されたものかもしれない。

Ⅲ408では土師器皿の内面に円弧を描いている。Ⅲ409・Ⅲ414は皿，Ⅲ410は椀の形態を示す。また，Ⅲ411は土師器受皿である。これら４点は小破片でもあり，文字と確定できるものもなく，墨書の内容は判然としない。Ⅲ412は灰釉系陶器鉢。半分を欠失しているが，その底部に円弧を描いたものとみられる。他の例と比較して，本例は目印として付された感がある。Ⅲ413は土師器の高台付の皿。底面に三点を書いている。このように墨書をもつ遺物には，土師器が多いことが特徴としてあげられる。また，これらはほぼ13～14世紀のものであり，中世においてこの調査区一帯が生活空間として，最も活況を呈していたころのものと考えられる。

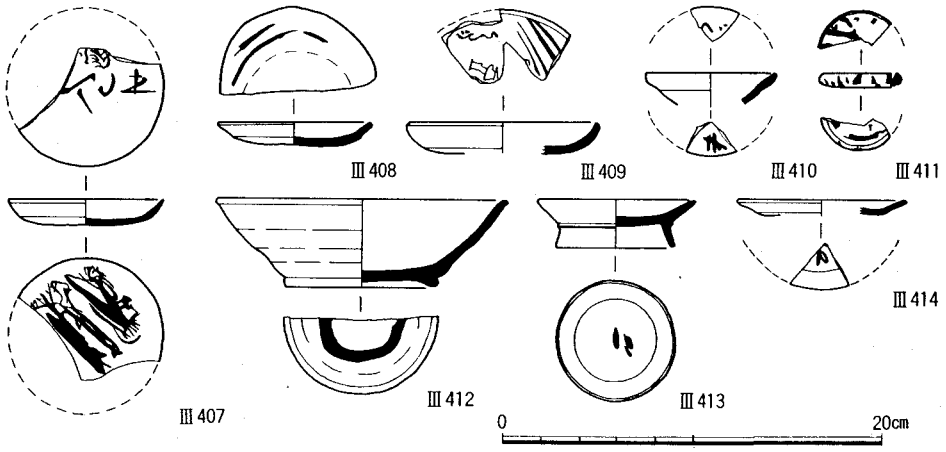


図35　墨書土器（Ⅲ407不定形土坑，Ⅲ408・Ⅲ414ＳＥ４，Ⅲ409ＳＤ131，Ⅲ410ＳＫ66，Ⅲ411ＳＤ130，Ⅲ412黄灰色砂質土，Ⅲ413攪乱）

漆　器（Ⅲ415～Ⅲ425）　13世紀後葉ごろの井戸ＳＥ４水溜，暗赤褐色土層からは，良好な遺存状態の漆器類が出土した。なお，Ⅲ415・Ⅲ420・Ⅲ422を除く資料は，すべて木質部が完全に腐朽しており，漆の皮膜のみが残存していた。

Ⅲ415は漆器の椀。口縁部の大半を欠失し，かなりひしゃげているものの，全体の約2/3が残存しており，その形態を推定できる。高台径は約6.5cm。黒色漆の地の上に，内面見込みと外面の三方向に，赤色漆で竹笹の枝葉を描いている（巻首図版）。

Ⅲ416～Ⅲ425は，すべて小薄片であり，器種や外面・内面の区別など不明である。Ⅲ416～Ⅲ418は，花文をスタンプによって施す。Ⅲ419・Ⅲ420・Ⅲ422～Ⅲ425には同趣の草文，Ⅲ421・Ⅲ422は，花文がそれぞれ描かれている。描かれた文様はくずれがみられず鎌倉時代の漆器として優品とみられ，スタンプによって付された文様も当時盛行したものに属する。大量に漆器が出土した鎌倉市佐助ケ谷遺跡の資料中に類したものがみられる〔佐助ケ谷遺跡発掘調査団93〕。

木製品（Ⅲ426～Ⅲ436）　Ⅲ426は草履状木製品。ＳＤ132最下層から断片となって出土したが，長径22.5cm，短径10.5cm，厚さ４㎜の楕円形の板を半割した形態に復原できる。その上に藁や藺を編み上げて作る草履の芯板と推定される。上部には小さい穴がある。外縁の中央部のやや下寄りには，四角形の切り込みがあり，鼻緒を固定するためのものである。表面の各所には，藁の一部と思われるものが密着している。本例は広島県草戸千軒町遺跡出土品のＡタイプに相当し，山形県城輪柵跡，鎌倉市街地遺跡，福岡県御笠川南条坊遺跡などの，各地の中世の遺跡から出土している。『七十一番歌合』廿一番ざうりつくりの売り歩く「いたかんがう（板金剛）」にあたるものと考えられている〔篠原85，市田89〕。はきものの歴史を考察するうえで，貴重な資料である。Ⅲ427は曲物の底部。目釘穴などはみられない。ＳＥ11の底部から出土した。Ⅲ428は刀子の鞘の部分。両端部に締金具を装着した痕跡がある。柄部との境目で断れた断面三角形の刀子の身が鞘の内部に残存している。これもＳＥ11の底部から出土。Ⅲ429～Ⅲ436は箸。ＳＤ132の最下層から出土した。Ⅲ443～Ⅲ436は先端部の残る例。全長のわかるものはない。

その他の遺物　井戸ＳＥ４・ＳＥ11の水溜や溝ＳＤ132の最下層からは，種実が総計７点出土した。これらは，流通科学大学の南木睦夫氏の鑑定により，すべてモモの核であることが判明した。また，土器溜ＳＫ62からは，赤色顔料が検出されたため，環境保全センターに分析を依頼したところ，水銀朱であることが報告された。その用途などは明かではない。

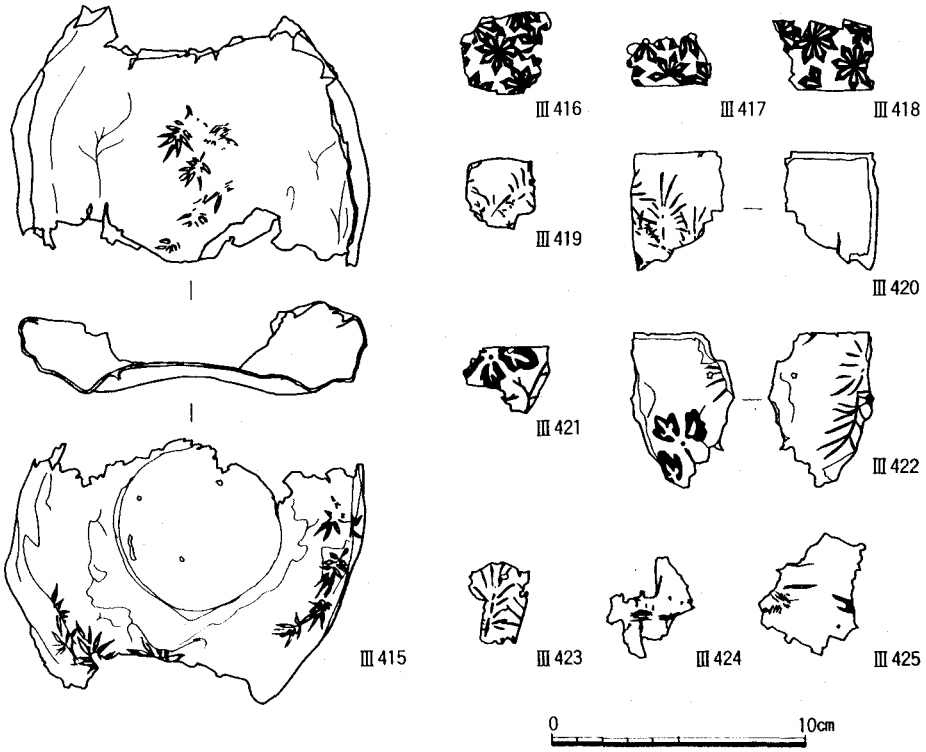


図36 漆器 (Ⅲ415～Ⅲ418・Ⅲ421・Ⅲ423～Ⅲ425ＳＥ４，Ⅲ419・Ⅲ420・Ⅲ422暗赤褐色土)
縮尺 1/3

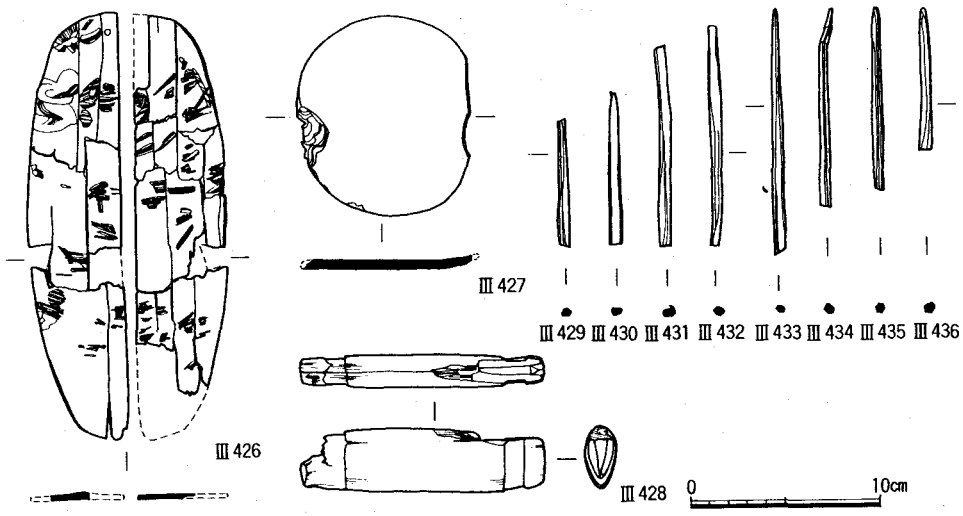


図37 木製品 (Ⅲ426・Ⅲ429～Ⅲ436ＳＤ132，Ⅲ427・Ⅲ428ＳＥ12)

6　出土木材の樹種同定

京都市左京区吉田近衛町にある京都大学医学部構内南西部に位置するＡＭ17区は，旧白川の形成した扇状地の末端にあたる。調査区の西半では，中世の遺物を包含する数枚の堆積層がみられる。各堆積層の上面からは，様々な遺構を検出したが，それらは13～14世紀を中心とし，井戸，溝，土器溜などの生活に関わる遺構群，および15～16世紀の水田や畑の跡と思われる多数の溝に大きく分けられる。そのうち13～14世紀の溝や井戸，土器溜などの遺構の埋土からは，炭化材を中心とする木材が多数出土した。今回は，出土した木材34点について，樹種の同定をおこなった。

出土木材から横断面，柾目面，板目面が露出するように手で割った。露出した面を落射型顕微鏡（ライツ社，ウルトラパーク）により同定した。同定の結果は表３にまとめ，顕微鏡写真を図版15・16に示した。34点の試料のうち，コウヤマキが１点，ヒノキが１点，クヌギ節（クヌギ類）が22点，アカガシ亜属（カシ類）が７点，ブナが１点，タケ類が１点であった。

なお，樹種同定の拠点は次の通りである。

コウヤマキ（*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.）　樹脂道ならびに樹脂細胞を欠く。分野壁孔は窓状。放射組織は単列。

ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* Endl.）　樹脂道を欠く。樹脂細胞は接線状に分布する。分野壁孔はヒノキ型。放射組織は単列。

クヌギ節（*Quercus* sp. Lepidobalanus, Sect. Cerris）　環孔材。道管は単穿孔を有する。孔圏道管にチロースが存在する。孔圏外道管はほぼ単独で，放射状にならび，壁は厚い。単列放射組織と広放射組織とがみられる。図版の写真説明では便宜上クヌギ類と記した。

アカガシ亜属（*Quercus* sp. Cyclobalanopsis）　放射孔材。ほぼ大きさのそろった道管が放射状に配列する。道管は単穿孔を有する。単列放射組織と広放射組織とがみられる。写真説明では便宜上カシ類と記した。

ブ　ナ（*Fagus crenata* Blume）　散孔材。年輪始めに道管の分布が多い。放射組織は単列放射組織から広放射組織に近いものまで様々な幅のものがみられる。

タケ亜科（Bambusoideae）　維管束が基本組織の中に不規則に散在する。維管束は少量の木部と師部の他に大量の繊維群からなる。写真説明では便宜上タケ類と記した。

表3　AM17区出土木材の樹種同定結果

試料番号	出土遺構	遺物の形状	時代	同定樹種	写真
1	SD130	炭化材	13世紀中葉	クヌギ節	図版15-6
2	〃	〃	〃	〃	
3	〃	〃	〃	〃	図版15-7
4	〃	〃	〃	〃	
5	〃	〃	〃	〃	
6	SD132	〃	〃	〃	図版15-1
7	〃	〃	〃	〃	図版15-2
8	〃	〃	〃	アカガシ亜属	図版15-3
9	〃	〃	〃	〃	図版15-4
10	〃	〃	〃	クヌギ節	
11	〃	管状腐食材	〃	タケ類	図版15-5
12	SX6	炭化材	14世紀中葉	アカガシ亜属	図版15-8
13	〃	〃	〃	〃	図版15-9
14	〃	〃	〃	〃	
15	〃	〃	〃	クヌギ節	図版16-10
16	〃	〃	〃	アカガシ亜属	
17	SK21	〃	13世紀後葉	〃	図版16-11
18	〃	〃	〃	クヌギ節	図版16-12
19	〃	〃	〃	〃	
20	〃	〃	〃	〃	
21	〃	〃	〃	〃	
22	SK41	〃	14世紀前葉	〃	図版16-13
23	〃	〃	〃	〃	
24	〃	〃	〃	〃	
25	〃	〃	〃	〃	
26	〃	〃	〃	ブナ	図版16-16
27	SK43	〃	14世紀中葉	クヌギ節	
28	〃	〃	〃	〃	
29	〃	〃	〃	〃？	
30	〃	〃	〃	〃	図版16-17
31	〃	〃	〃	〃	図版16-18
32	SE3	木片	14世紀前葉～中葉	ヒノキ	図版16-14
33	SE11	〃	14世紀中葉	コウヤマキ	図版16-15
34	SX6	樹皮(?)	〃	非植物質	

7　近世の遺跡

(1)　近世の遺構（図版４・７，図17下）

近世の遺構は基本的に水田や畑に関するものである。調査区東半のほぼ中央部にあたるＹ＝1910付近には，ほぼ南北方向の細長い地山の高まりであるＳＦ１が帯状に残っており，東側には溝ＳＤ３がはしる。このＳＦ１は田畑の間をぬう道路の痕跡であり，地境となっていたものと考えられる。ＳＦ１の両脇には野壷ＳＥ７・ＳＥ９・ＳＥ10を検出した。野壷は直径1.5～2.0ｍの円形の掘形を呈し，深さは約50cmほどである。ＳＥ９とＳＥ10では，はめこまれていた桶の木枠の跡を確認でき，その底部には桶の底板を支える桟の痕跡が明瞭に残っていた。これらの野壷の存在する地点は，かつての田畑の隅付近にあたるものと推定できる。また，道路ＳＦ１の南寄りで，東西方向に道路を溝状に切り，側面に河原石を配した箇所がみられた。溝ＳＤ３から西方の水田への取水口として，小溝がもうけられたのであろう。

この道路ＳＦ１の北寄りの地点を出発点として，河原石を現状で１～２段ほど並べた石垣ＳＸ１が，西へまっすぐに約35ｍ続く。そこから南南西の方向へ約120°の角度で折れて約15ｍほど連なり，石列は失われているが段差が調査区の南西隅まで続いている。石は段状に削り出した斜面に並べたもので，東西方向の部分の北側には小溝をともなう。この石列で区切られた段をはじめ，調査区西半では北北東から南南西方向へ，あるいは，ほぼ北から南へ伸びる段差を少なくとも３段検出している。これから，東から西へ傾斜した地形に対して棚田が数段にわたって造成されていたものと考えられる。また，調査区の西半から東半の西域では，棚田は北にむかって低く形成されている。ＳＸ１の曲がる付近でも，直径約1.5ｍの円形の掘形を示す野壷ＳＥ８を検出した。枠板痕などは明瞭ではなかったが，検出面から底部まで約40cm程度であり，東半で検出した野壷と同様の構造とみられる。

このほか，東半の西辺で不定形土坑を検出したが，近世の土取り穴と思われる。その平面形は不整形で，周辺で検出した中世のものとあまり変わらない。採取の対象は地山層の黄灰色シルトとみられる。本調査区の南東側に位置する病院構内の154・155の両地点で検出した近世半ばごろの土取り穴は，掘削の単位が方形を呈し，畔道を残して大規模に黄灰色シルトや黒灰色粘質土を採取していたことが明らかになっている〔五十川ほか89〕。これらにくらべて，本調査区の土取り穴はかなり小規模であり，短期間にごく少量の土を掘り取ったものであろう。

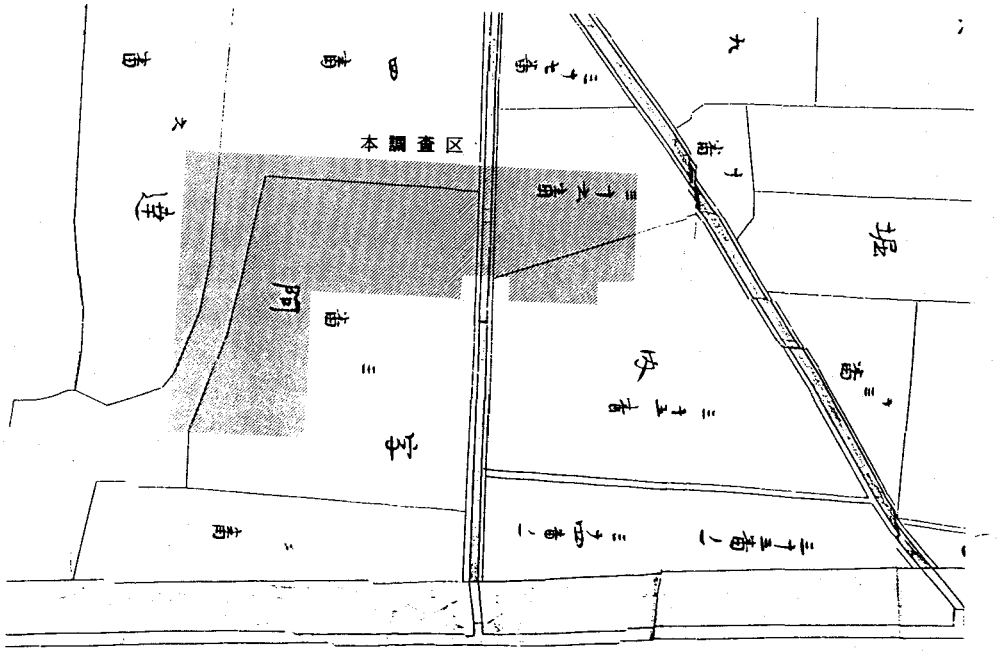


図38　調査区一帯の地籍図（明治29年ごろ）　縮尺 1/1200

これらの棚田を中心とする近世の遺構は，江戸時代半ばごろに形成されていたものと思われるが，明治29年に京都帝国大学の敷地となるまで，こうした土地の利用形態は続いていたようである。この地が大学に買い上げられた際に作成された地図（図38）をみると，周辺は一帯に田畑となっていたことがわかる。本調査区で検出したＳＦ１とＳＤ３に該当するところには，南北方向にはしる道路と水路が描かれいる。これによって，道路ＳＦ１は，旧小字の堀内と阿達との境界となっていたことが明らかとなり，現在ではわからなくなった土地境界を知ることができた。これまでの周辺地域の発掘調査によって，近世の土地境界がそれよりさかのぼる中世の境界と大きくかかわっていることがあり，近世の地境の解明が，中世の土地利用を復原する手がかりとなる。

また，石垣ＳＸ１とそれに続く段差や，その西側に平行してはしる段差は，地図に示された字阿達地内の三番，四番，六番の地番の境界線と，ほぼ重なる位置にあることも判明し，現在ではほぼ平坦に造成されてしまった調査区周辺の地も，100年ほど前には扇状地の末端部における複雑な凹凸の形状をとどめていたのである。微小な凹凸ではあるが，その地形に対して，中世以降，生活面の形成と田畑の造成がつづけられてきたことは，さきに詳述したとおりである。

(2) 近世の遺物（図39）

野壷ＳＥ８・ＳＥ９などの遺構や不定形土坑の埋土，茶褐色土などの包含層から，近世の遺物が出土した。遺物の全体量は中世のものと比較してきわめて少量であり，江戸時代以降，明治時代の初期にいたる間には，この周辺に人々が集住して恒常的に生活が営まれていた可能性は少ない。

ＳＥ８出土遺物（Ⅲ437～Ⅲ439）　Ⅲ437～Ⅲ439は土師器皿。Ⅲ437・Ⅲ438には先端のとがったもので付された圏線が確認できる。Ⅲ437はやや薄手であり，口縁端部はつまみあげた形状をなしている。

ＳＥ９出土遺物（Ⅲ440～Ⅲ451）　Ⅲ440は土師器皿。圏線を確認でき，体部と底部との境目は不明瞭である。Ⅲ441～Ⅲ443は陶器椀。Ⅲ441は淡緑色の釉調を示し,内面に網目文を４数単位描く。Ⅲ442は黄緑色の釉調を示し，外面に花枝を描く。枝は茶褐色，花は藍色に彩色されている。Ⅲ441とともに京焼の小椀とみられる。Ⅲ443は緑灰色の釉のうえに白色の釉で文様を描く。外面は波状，内面は垂下する線を描き，見込みの釉を掻き取っている。Ⅲ444は白磁皿。釉は厚く，見込み周縁部は釉を掻き取り,外面下半は露胎である。Ⅲ445は口縁が屈曲する陶器皿。緑灰色の釉を施し，内面には緑色の点を描く。外面下半は露胎である。Ⅲ446～Ⅲ451は染付。Ⅲ446・Ⅲ447・Ⅲ449～Ⅲ451は椀。Ⅲ446は菊花が半分のぞく文様，Ⅲ447・Ⅲ450は草花，Ⅲ449は唐草状に連続する菊花を，それぞれ描いている。Ⅲ450は，くらわんか手の椀。Ⅲ449は染付皿。内面には蔓草の文様を描く。

土取り穴出土遺物（Ⅲ452～Ⅲ457）　Ⅲ452・Ⅲ453は陶器椀。Ⅲ452は黄色の釉調を示す。Ⅲ453は茶色の釉のうえに，白線を螺旋状に描く。Ⅲ454～Ⅲ457は染付。Ⅲ454は伊万里系の皿。Ⅲ455～Ⅲ457は椀。Ⅲ455は梅花文，Ⅲ456は網目文をそれぞれ描く。Ⅲ457は二次的に火をうけており，文様は識別できない。

茶褐色土出土遺物（Ⅲ458～Ⅲ463）　Ⅲ458～Ⅲ460は土師器。Ⅲ458・Ⅲ459は皿。ともに圏線をもつ。Ⅲ460は焼塩壷の蓋。赤褐色を呈し，天井部は扁平で，垂下する小さい口縁部がつく。内面には布目が残る。Ⅲ461～Ⅲ463は陶器椀。Ⅲ461は二次的に火を受けているが，茶褐色の釉を螺旋状にかけ，その濃淡が筋目となっている。Ⅲ462はⅢ453と同趣である。Ⅲ463は茶褐色の釉を全体に施す薄手の椀である。

これらの資料は出土量も少ないため年代決定は難しいが，ほぼ近世の後半を中心とするものである。そのうち，土取り穴出土品は18世紀ごろ，ＳＥ９は19世紀前葉～中葉ごろのものと推定しておく。

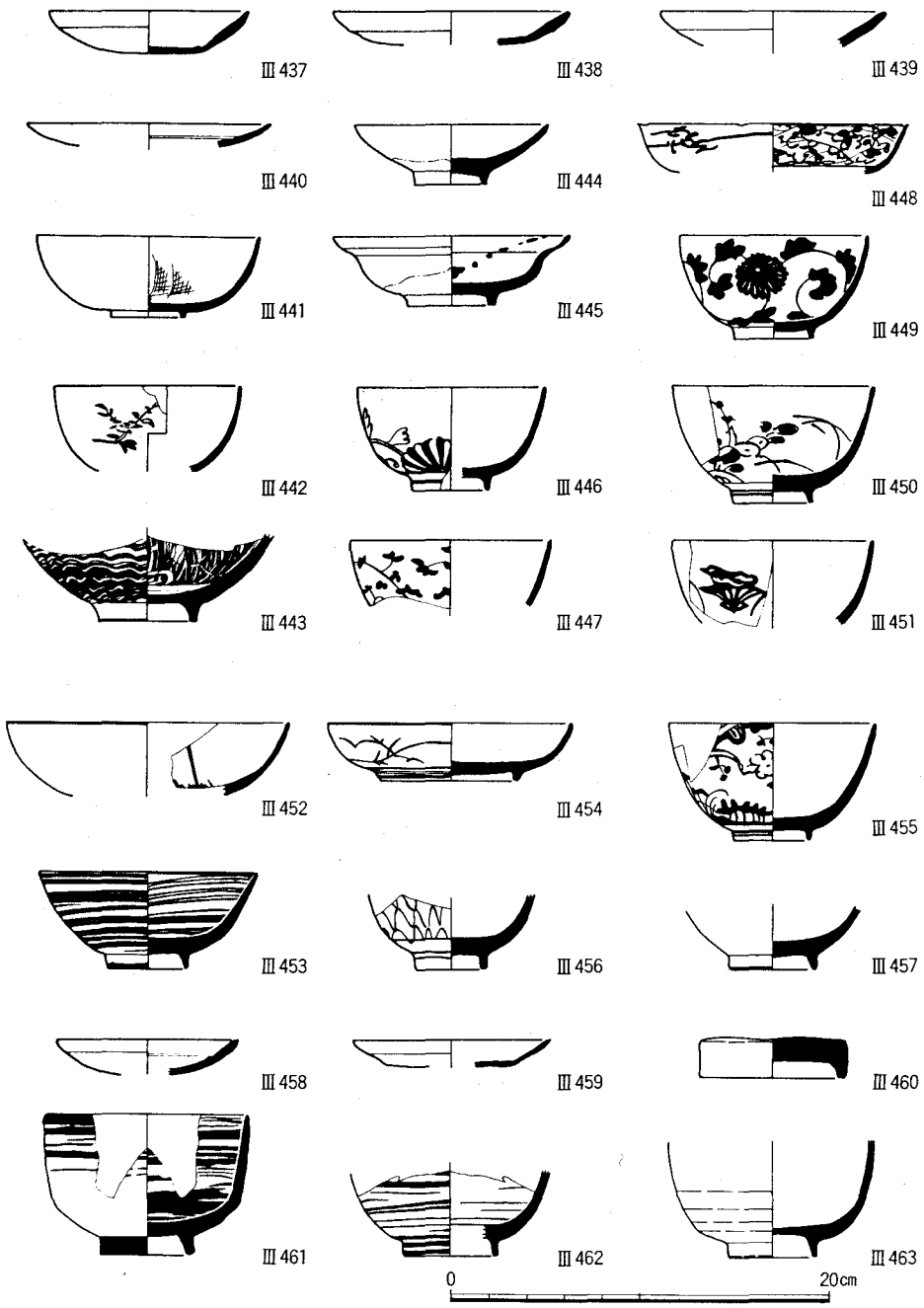


図39　ＳＥ８出土遺物（Ⅲ437～Ⅲ439土師器），ＳＥ９出土遺物（Ⅲ440土師器，Ⅲ441～Ⅲ443・Ⅲ445陶器，Ⅲ444白磁，Ⅲ446～Ⅲ451染付），土取り穴出土遺物（Ⅲ452・Ⅲ453陶器，Ⅲ454～Ⅲ457染付），茶褐色土出土遺物（Ⅲ458～Ⅲ460土師器，Ⅲ461～Ⅲ463陶器）

8　小　　結

以上のような遺構の状況から，これまでの周辺の遺跡調査の調査成果も勘案して，この遺跡地の歴史的景観の変遷について記述する。

中世はじめの開発　11世紀末～12世紀には，鴨川の東の白河と呼ばれる一帯に六勝寺や院の御所などが続々と造営されて市街地化がすすんだ。そして，白河街区と呼ばれる平安京の条坊を東に延長した道路網が形成され，その北端は調査区周辺にまでおよんでいたことが判明している〔浜崎91〕。また，12世紀半ばごろには，藤原北家勧修寺流の人々が吉田の地に居をかまえたことが知られている。本調査区検出の12世紀にさかのぼる遺構には，土器溜ＳＫ７・ＳＫ91があり，上記のような動向のなかでこれらの遺構が形成されたものとみられる。

中世前半の遺構の変遷　本遺跡地の西半では13世紀中葉ごろまでに，傾斜地を掘り込んで，崖下に溝ＳＤ131が掘削され，広い平坦地が造成された。溝ＳＤ132・ＳＤ130もほぼ同時期に掘削され，あいついで土器溜が形成されている。その後，建物ＳＢ１を中心に，溝や各種の土坑，土器溜が形成されていった。ここが生活居住空間として活用され，稠密な人間の活動があったものとみてよい。土器溜には13世紀～14世紀わたるものがみられるが，一連の遺構のピークは，ほぼ14世紀の前葉から中葉ごろにあるとみられ，14世紀の後葉に降る明確な遺構や遺物を見いだしていない。遺跡地は中世の前半に，生活の場として最も活用されていたものと推定できる。

また，本調査区の北に位置する41地点や74地点でも，13～14世紀にわたる井戸，溝，建物などを中心とする遺構群や豊富な輸入陶磁器が発見されており，勧修寺流の人々にかかわる邸宅の一角にあたるものと推定している〔泉・吉野79，清水・吉野81〕。本調査区にみられる中世前半の遺構群も，これまでの調査で確認されている遺構群と関連するものと推定されるが，遺構のありかたから考えて邸宅の中央部ではなく，その周辺部に居住した人々にかかわる遺跡に該当するものと考えている。

金属生産の工房の遺跡　また，本調査区の北に隣接する143地点では，13世紀前葉ごろに梵鐘や鏡を製作した鋳造工人の工房が検出されている〔五十川・宮本88〕。また，医学部東南隅の169地点でも六器などの鋳型が出土しており〔浜崎90〕，周辺に鋳物生産の跡がみられる。今回の調査では，出土遺物を注意して観察したが，鋳型や坩堝などの鋳物生産にかかわる遺物を確認できなかった。この中世の鋳造工房は小規模で，かつ点々と移動

していたのかもしれない。このほか，多量の鉄滓が，調査区西端に位置する土坑ＳＫ84とその周辺から出土している。鍛冶がおこなわれていた可能性もある。まとまった量の鉄滓がみられるため，一時的な鍛冶のための作業場というより，いくらか継続的に生産がおこなれたのではないかと推定できる。以上のように，医学部構内一帯の地は，さきに述べた勧修寺流の邸宅の一角であるばかりではなく，鋳造工人や鍛冶工人などの金属生産にかかわる人々の本拠でもあったことが，次第に明らかとなってきた。

南北朝以降の展開　さて，こうした中世前半の景観は，14世紀の半ばごろを境として変貌をとげる。14世紀中葉の南北朝の動乱期に，この吉田周辺は戦場となり，神楽岡（吉田山）には城がもうけられた。周辺の遺跡でも，14世紀後葉以降の生活に関連する遺構はすくなく，争乱の後，耕作地が増加したものと推定されている。さらに，応仁の乱の後，周辺の土地の権利関係は大きく変貌し，勧修寺家を中心とする邸宅なども廃絶していったものとみられる。そして，16世紀前半には，吉田社を中核とする吉田の構（かまえ）が築かれ，その周辺は田畑化がさらに進展していった。その姿は近世吉田村にひきつがれており，近世の絵図などによって中世後半の景観を復原することもできる〔浜崎83b〕。

本調査区でも，15世紀以降は，溝を主体とする耕作に関する遺構が中心であり，周辺の遺跡の状況と軌を一にする。また，扇状地の端部に形成された緩やかな谷状地形に土を積み重ねて，耕作面を上へ上へと形成している。京都大学北部構内ＢＥ33区(125地点）でも，中世初めごろに耕地の開発を開始して，谷水田を形成し，やがて谷を埋めていった遺跡を確認している〔泉・三宅86〕。このように，中世にいたって，白川扇状地の各所において，水田や畑地の開発が進んだことが，遺跡調査によって確認できる。

吉田の構と吉田村　中世後半～近世の遺跡としては，溝や野壷を検出しており，近世も引続き水田や畑として利用されたと推定される。しかし，16世紀から17世紀にかけての時期の遺物は極端に少なく，周辺の遺跡調査でも，この時期の良好な包含層の検出例も皆無にひとしい。京都大学吉田キャンパスの遺跡全体でもその傾向がある。これは，この地域全体の中世末～近世初期の土地利用を推定するひとつの手がかりといえるだろう。すなわち，吉田の構を中心とする部分に，生活にかかわる居住地域が局限されていたのではなかろうか。そして18世紀ごろにいたって，構の外側一帯の地域にも，ぽつぽつと地下屋敷（農家）などが形成され，吉田村の人々の生活空間が，以前の構に包括される部分の周辺地域に展開していったのではないかと推定する。この吉田の構は応仁の乱の後に形成されたものであり，近世の吉田村の中心地域も，これを継承したものであった。それは，京都

大学総合人間学部（旧教養部）構内の東側にあたり，現在も吉田社，斎場所大元宮の西にはかつての社家町の古い町並みが残されている。今後，文献史料などの分析などもふくめて，近世はじめごろの景観について検討をおこなう必要がある。

医科大学設置以後　その後，調査区一帯は，明治29年に医科大学用地として京都帝国大学が購入したが，この時点では棚田が残っていた。この棚田は，中世後半の耕地開発を物語る重要な痕跡であった。しかし，その後，大学用地として大規模な造成がおこなわれ，周辺は現在，ほぼ東西に平坦となり，棚田の痕跡は地表面上には完全にかき消されてしまった。以上のように，今回の調査では，谷状の土地を造成し，営々と埋め立てて利用し続けてきた当地の土地利用の変遷を明らかにすることができた。

なお，出土種実については，流通科学大学の南木睦夫氏の鑑定を得た。鉱滓については，京都造形芸術短期大学の内田俊秀氏に御教示を得た。また，漆器に関しては，京都市埋蔵文化財研究所岡田文男氏のお世話になり，草履状木製品については，日本はきもの博物館の市田京子氏の御教示を得た。末尾ながら謝意を表する次第である。

現地調査は，五十川伸矢，森下章司が担当し，磯谷敦子，本学文学部学生の中井淳史・村上由美子・本吉恵理子が測量・実測などの作業にあたった。また，五十川，伊藤淳史，磯谷敦子，矢野由記子，中井淳史，村上由美子，本吉恵理子が，出土遺物の整理をおこなった。